
時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

【Nコード】

N3463N

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

少年の祖父が死んだ。突然もたされた知らせにベルタは愕然とする。大嫌いな祖父なのに気が急ぐ。一刻も実家に帰らなければ、と彼の知らない真実はすべて過去の扉の向こうにある。時を渡り、彼は真実を追う。

紅炎のソレンティアの二次創作小説です。『翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -』にリンクしています。

1・帰っておいでと、君が嘆くから（前書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」(<http://solenatia.jp/>)の二次創作小説です。

1・帰っておいでと、君が嘆くから

……なんか来た。

そう感じた一瞬後、

扉に鍵を閉めておけば良かったと、激しく後悔をした。

「やつほー！ ベルにゃん、生きてる〜？」

……死んだ。

今！ まさに今！ 死んだぞっ！！！！

俺はベッドに突っ伏した。

青髪の猫獣人。

俺の隣室で生活しているはずなのだが、
その服装は、なんつーか、あれだ。あれ。メイド姿。

女装か！？ と聞いたら、

女性化にゃん！ と言い返されてから、

彼だか彼女だかの格好については見て見ぬ振りを決めている。

「最近顔見てないからこつちから顔出してみたよ。
風邪は治ったかな？」

「いや、まだ…」

というか、お前のおかげで頭痛が増したぜ。
俺はベッドに突っ伏したまま、手を左右に振り、返事をした。
すると、彼だか彼女だかは、ぺらりと封筒を出した。

「べるにゃんにお手紙が来てたにゃん」

「手紙？」

「べるにゃんの実家からにゃん」

「にゃんにゃん言つな、頭痛い」

体調不良のため、若干余裕のない俺は、
悪態を付きながら、差し出された封筒を奪い取った。

開いてみると、懐かしい人の文字が綴られてあった。
しかし、それはごく短く、至って簡潔に。

『 旦那さまが危篤です
すぐにご帰郷下さい 』

「 どうしたにゃん？ 」

無言になった俺の顔を、下から覗き込んでくる。

「 帰らないと 」

「 帰るにゃん？ 」

「 ……」

驚いた声に返事はしない。

ベッドから足を降ろし、夜着を脱ぎ捨てた。

「べるにゃん、顔色悪いにゃん」

「知ってる」

「具合まだ悪いにゃん？」

「知らない」

「本当に帰るにゃん？」

「帰る」

帰らないと。

何日前に書かれた手紙だろうか。
危篤だったのは、いったいいつ？

手紙を送ってきたのは、家政婦デボラだ。

彼女が「大胆那」と呼ぶ相手は1人しかいない。

祖父だ。

あのジジイが死んだら……。

嫌な汗が出る。

考えるだけで恐ろしい。

無事なのだろうか。

幼い妹を思い、体が震える。

大切に大切に育ててきた妹。
彼女だけは護りたい。

「べるにゃんっ！……！」

部屋から出る背中に向かって声が響く。
振り返る。

「悪い！もう行く！
みんなによろしく伝えておいてくれ」

もう一度、声が響く。
だけど、今度は振り返らない。

帰郷願いを提出するために、俺は学生課に走った。

2・この嘆きは、君しか知らない。

紅葉した木々をちらりと横目にして、俺はため息を付く。

（1年と4ヶ月…）

随分と長く帰らなかったものだ。

馴染みの路地を駆け抜け、腰丈の門を押し開くと、
焦げ茶色の扉が正面に見える。

秋の花々で埋め尽くされた前庭には目をくれず、俺は玄関を叩いた。

「おかえりなさい」

一瞬、自分がいるのかと思った。
幼い頃の自分が。

「ただいま、セレナ」

小さな妹を抱き締める。

暖かくて、柔らかくて、なんだか泣きそうになった。

家の奥から家政婦のデボラが出てきて、
大きな荷物を玄関口に置いた。

「こちらがベルタさんの荷物です。

セレナさんの荷物はすでに車に積んであります」

「ありがとうございます。……って、車!？」

「他にどのように行かれるつもりですか？」

「デボラが運転すんの？」

「私はこの家の留守を預かります」

「じゃあ……」

(マリーさんが?)

そう思ったが、デボラの姪である彼女の姿は見えない。

「マリーは一足先に大旦那さまのところに行かせました」

「じゃあ……誰が……」

にっこりと微笑まれて、俺は自分を指差す。

「ええっ!? 俺!？」

「安全運転をお願いします」

「……」

セレナを助手席に乘せて、しっかりシートベルトを締めさせる。
無駄に心臓がドクバク言っている。

嫌な汗まで出しながら、俺はハンドルを握った。
一度だけデボラに視線を向けてから、アクセルを踏んだ。

「ベルタ、大丈夫？」

門を出てからしばらく、通りに出たところで、
セレナが俺の顔を窺ってきた。

「顔色悪いよ？」

「……」

「お祖父様、大丈夫かな？」

「……」

「お勉強、大変？」

「……」

「音楽掛けてもいい？」

「ごっ、ごめん！無理！」

頼むから、空気のように息を凝らしていてくれ……！」

白状しよう。

運転免許を取って以来、一度も運転したことがない。
だって、ソレンティアに入学してしまったのだ。
仕方がないではないか。

集中して運転しなければ、ぜったい事故る！
死ぬっ！！！！

しかし、家を出発してから30分も経つと、
集中力は切れるわけで。

隣から寝息が聞こえてくるわけで…。

ひたすらに真っ直ぐと伸びる道路には他に車もなく、
運転は単調な上、俺も慣れっというものが出てくる。

そして、ぼんやり考えてしまう。

(今なら分かるよ、お前のこと…)

フロントガラスにうつすらと写る自分は、
酷く歪んでいて、みすばらしく見えた。

『バランスが…取れないんだ』

『バランス？』

『そう…』

『構って貰えなくなるのは寂しい』

『大丈夫。ちゃんと構うから』

でも結局、彼は休学して、
退学こそしなかったけれど、でも、会えない。

(今なら分かるよ、だから…)

だから、今は一番お前と話がしたい。

『俺、お前のことが分かるよ』
『なんでだよ、気持ちわりいー』

分かっているような気がしていただけかも知れない。
だけど、本当に分かっていた。
…と思っていた。

『2人はよく似ています。
というか、同じなんです！
同じくらいどうでもいいんですよ、他人のことが』

以前そう言われた時は、首を傾げたけれど、
今は、その通りかもしれないと思う。

振り返れば、俺は彼と同じことをしている。

俺の方が半歩も、何歩も、彼より遅れているけれど。

だからこそ、彼と話がしたい。今。

（俺、分かるよ。お前のことが…）

「あ」

「どうしたの？」

「今のところを左に曲がらないといけないんだった」

「次のところを曲がったら？」

「ダメだ。一方通行だ。曲がれない」

仕方がない。戻ろう。

俺はハンドルを切った。

この辺りから、道が悪くなる。
狭いし、砂利が多い。

スピードを落として進むしかない。

車が珍しいのか、横を過ぎる時に振り返られる。
子どもたちが追ってくる。

やがて、森の入口に辿り着いた。
ここからは歩くしかない。

適当な場所に駐車して、セレナに降りるように促した。

「自分の荷物は自分で持てるよな？」

「うん」

「ごめんな」

「どうして謝るの？」

「自分の荷物で手一杯で、セレナの荷物を持ってあげられないから」
「大丈夫よ。」

私だって私の荷物くらい持てるもの」

「でも……」

（でも、お前に重たい思いをさせたくないんだ）

苦しい思いも、
悲しい思いも、
なにも知らずにいて欲しい。

そう願ってしまう。

「ベルタ、泣かないで？」

「泣いてないよ」

「きつとお祖父様は大丈夫だから。…ね？」

「そうじゃ…」

（そうじゃなくて）

言葉にならず、口を閉ざす。

今、頭の中を巡るのは、祖父のことでは無かった。
それがとても不謹慎なことのように思えて、
自分のこの想いをセレナには悟られなくなかった。

森の奥。

そこに独りで暮らす祖父。

自分の殻に閉じこもるかのように。

俺も祖父のように暮らせたら、

俺の醜さから、みんなを護れるのに…。

（俺、お前と同じだよ）

違うと思ったから、好きになって、
もっともっと話がしたいと思った。

俺とは異なる意見が聞きたくて。

たくさん喧嘩して、もう無理だと思って逃げて、
でもやっぱり好きだと思って、会いに行く。

けど、今は、

どこに会いに行けば、会えるのだろうか…。

踏み締めた落ち葉が小さく声を上げる。

ここは“眠り森”

その名に相応しく動物たちの気配はない。

静かな、静かな、そして、昼間でも夜のように暗い森。

やがて、大きな館が見えてきた。

3・死に行く君に残された刻の欠片

「お帰りなさい」

鈍い音を響かせて扉が開くと、
薄闇の中から青白い顔が現れ、掠れ声を響かせた。

「ただいま」

そう応えたが、帰ってきた気はしない。
ここは俺の“家”じゃないから。

「さあ、早く大旦那様のところへ」
「リリーさん、ありがとう。その…」

家政婦デボラの姪である彼女は、俺にとって姉のような存在だ。
10歳年上で、気の強い彼女には、
幼い頃、散々からかわれた記憶がある。

だけど、
一度たりとも彼女を嫌ったことはない。
むしろ好きだ。

啞然とするくらいにあっけなく散った初恋の相手は、
もはや隠す気もないので言ってしまうえば、彼女であり、
その時ですら、あまりにもあっさりと振ってくれたもので、
気まづくなる余地さえ無かったほどである。

そんな彼女もすでに自分の家庭がある身だが、
何かあるとすぐに駆け付けてくれるところは変わらない。

礼を言うと、彼女はニツコリと微笑んで、
俺と妹セレナの手から荷物を受け取った。

「部屋に運んでおくわね」

頷き、彼女から荷物の代わりに燭台を受け取った。
右手で燭台を持つと、左手でセレナの手を握る。

「行こう、セレナ」

こくん、と小さな頭が動く気配を感じてから、
俺は薄闇の中に足を踏み入れた。

じりじりと、蠟が溶けていく音が響く。
足下から床に、そして壁に、長く長く伸びた影が、
ゆらゆらと蠢きながら、ゆっくりと後を追ってくる。

ぎゅっと強く手を握られて、俺はセレナを見やった。

俺の腰丈ほどしかない小さな彼女は、前方をじっと見据え、一步一步、踏みしめるように歩いている。

やがて、祖父の部屋の前にたどり着いた。

しつかりと3度その扉を叩くと、

部屋の中から、誰だ、と低い声が響いた。

「俺です。ベルタです。セレナも一緒です」

「お前だけ中に入れ」

「でも…」

「お前だけ入れ」

「……」

俺は背を丸めてかがむと、セレナに燭台を手渡した。

「リリーさんのところに行つてて」

セレナが頭を左右に振った。

「ここで待ってる？」

「……うん」

暗い廊下を1人で歩かせるよりマシかもしれないと思い直した。
妹の頭をひと撫ですると、俺は立ち上がる。

「すぐ戻ってくるからな」

「…うん。…あ……ベルタ…」

「ん？」

「…気をつけて」

淡く微笑んで、俺は祖父の部屋の中に入った。

薄暗い部屋の中、

祖父のベッドの枕元に一つだけ置かれた燭台の灯りだけを頼りに
そろりそろりと歩いて、祖父に近付く。

「お久しぶりです」

「……」

「危篤だという知らせでしたので、

ここに付く頃には、てっきりくたばっているかと期待していまし
た。

とってもお元気で、ガツカリです」

祖父は答えなかった。

枯れ木のような腕を掛布から出すと、俺の方へと伸ばしてくる。

灯りが、彼の腕を照らした。

「……っ」

思わず息を呑んだ。

その腕があまりにも醜かったからだ。

黒ずんだ肌。

彼が忌むダークエルフの肌の黒さなど比ではない。

それは、どろどろに腐った色。

事実、腐って肉が落ちた指先は骨が見えている。

不意に灯りの炎が大きく揺れ、祖父の顔を照らした。
再び息を呑む。

それから、大きく後ずさった。

顔中に広がった黒い痣。

もはや元々の造形が分からないほど。

醜い。

美しい種族であるとされるエルフが、
ここまで醜くなれるものなのか…。

愕然として、俺は立ちつくした。

「ベルタ…」

ハッ和我に返つたのは、名を呼ばれたからではなく、その醜い手で、腕を掴まれたからだ。死が近いことなど信じられないくらいに強い力。

「お前に受け入れて貰いたいモノがある」

「……いやだ」

「お前はそのためにいる」

「……いやだ」

「お前の役目だ」

「いやだっ！」

力いっぱい振り払った。

灯りに照らされた祖父の顔が驚く。

そして、その拍子に、ぼろりと右眼が敷布の上に落ちた。

「ならば、セレナを部屋の中に入れる」

俯いた頭上に、しゃがれた声が響いて、

慌てて顔を上げ、祖父に向かって頭を左右に振った。

「だっ、ダメだ。それだけは……っ!!」

祖父が何をしようとしているのか、正確には分からない。だけど、それは、途轍もなく恐ろしいこと。

そしてそれをしなければ、祖父はけして死ねない。
死んではならぬと、自分を課しているからだ。

ならば、永遠に祖父が独りでそれを抱え続ければいい。
そう思うが、それが不可能なことだと認められないほど、
俺は幼くはない。

（誰かが…）

その誰かが、なぜ自分なのだろうかと思った時、
いつも思い出すのは、父親の存在だ。

彼は祖父を毛嫌いし、家も子も何もかも捨て去った。

ただ、愛する人だけを連れて逃げた。

『お前も、お前の父親のように、わたしから逃げるのか？』

そう、何度も祖父に問われてきた。

逃げたいと思った。何度も。

そして、セレナと一緒に逃げるべきだったと、今この瞬間にも思う。

だけど、俺は逃げられなかった。

つまりは、これも運命ってということなのだろう。

一歩前進する。

怖い。

けれど、また一歩、足を前に踏み出す。

大丈夫。

そう心の中で呟き、何が？ と心に聞き返す。
だけど、きつと大丈夫。

そう思うことしか、今は慰めにならない。

祖父の手を、今度は自分から握った。

「受け取ってやるよ、ジジイ」

言うと、祖父は顔の痣を歪めた。

それが躊躇するような表情に見えて、俺は苦笑を漏らしてしまう。

「けして人を憎まず……」

「けして人を傷付けず、人を妬まず、恨まず」

「……心穏やかに……生きよ」

それは幼い頃から言われ続けてきた言葉。

祖父の言葉を引き継いで言えば、

彼は俺の言葉のさらに続きを口にした。

「それが……この呪いから逃れる唯一のすべ……」

繋いだ手が熱くなる。

皮膚が焼け爛れていくように感じて、
祖父の手を振り払いそうになった。

何かが流れ込んでくる。

それは魔力。

だが、俺がソレンティアで学び、
出会ってきた魔力とは、まったく異なるモノ。

黒く黒く黒く醜く汚れた力。

その時、目の前が真っ白になった。

自分の体が床に崩れ落ちていくのを感じる。

だが、その僅かな一瞬、俺は鮮やかな緑を見た。

谷に広がる鮮やかな色。

そして、谷を吹き抜けていく風の声。

その声はまるで女性の嘆き声のように悲しく聞こえたが、
谷に住まう者達の声は明るく、活気に溢れている。

そこに、キラリと輝く何かが落ちた。

そして、次の瞬間、谷は死んだ。

緑も消え、人々の笑い声も失われた。

ただ、もの悲しい風の嘆きと、

幾重にも折り重なった骸だけが残された。

ハッ和我に返った。

痛いと感じてからようやく、

床にうつ伏せに倒れている自分に気付いた。

祖父に視線を向ける。

ぴくりともしない彼に声を掛けてみる。

やはり動かない。

立ち上がり、祖父の体を揺さぶると、

その体はボロボロと土塊のように崩れていく。

燭台の灯りが痣を映し出した。

白い肌に黒く禍々しい痣を見つけて、俺は祖父の骸から逃げよう
に後ずさった。

だが、本当に逃げたかったのは、骸からではない。
灯りからだ。

自分の体に刻まれた痣を目の当たりにするのが、途轍もなく恐ろし
かったのだ…。

4・世界は君に残酷で

人嫌いだった祖父のために、別れの言葉は俺が告げる。

「神の御許で安らかに憩うことができますよう」

薄暗い森に、俺の声は静かに静かに響いた。

祖父の死を誰に知らせれば良いのか分からなかった。

祖母はすでに他界しているし、

祖父の近親者については聞いたことがない。

彼のただ1人の息子であり、

セレナと俺の父親である人は行方不明で、連絡を取る術がない。

だから、棺の傍には、セレナとリリーさんと俺だけ。

多くの人が眠る墓地は嫌がるだろうと思い、

祖父の屋敷の裏に、棺が入るくらいの穴をあけた。

聖書を朗読し、聖歌を歌い、
遺体の手を胸元で組み、十字架を握らせた。

ただし、遺体はボロボロで、
どれが指で、どこが胸だか分からない。
触れることさえ気が引けた。すぐに壊れてしまうから。

遺体に白い布をかけ、柩の中に白い花を入れ、柩は黒い布で覆う。
穴に棺を沈めると、土を被せた。

さすがにそれら作業を1人でやるのは困難で、
リリーさんに少し手伝って貰ったが、セレナにはやらせたくなくて、
先に屋敷の中へと返した。

ようやく埋め終わると、すっかり日は暮れていて、
カンテラの明かり無しでは、手元も見えないくらいに森は暗い。

シャベルを肩に担ぎ、屋敷の中に戻ると、その明かりの下で、
泥が付いているわよ、とリリーさんが俺の頬に触れてきた。
俺は顔を背け、その手から逃れた。

「リリーさんが汚れてしまう」
「洗うからいいわ」
「なら、俺の顔を洗うよ」

彼女の横を擦り抜けて、洗面所に向かう。
訝しんだ声が追ってきた。

「どうしたの？」

「なんでもない」

「そうかしら？」

蛇口を捻って水を出す。

手を洗い、顔を洗い、もう一度、手を洗い、顔を洗う。

洗っても、洗っても、綺麗になっていないように思えて、
何度も、何度も、何度も洗う。

「皮が剥けてしまうわ」

構わないと思った。

それで綺麗になるのなら。

「もうやめて。汚れていないわっ」

泡だらけの手を掴まれて、俺は目頭が熱くなった。

もっともっと洗わないと、とそれしか考えられなくて。

「痣よ。汚れじゃないわ」

洗っても落ちない、とリリーさんは声音を低めた。

彼女が掴んだ俺の右手には、その手のひらから手首にかけて、そして、右腕、左肩、首に届くまで、ずっと、醜い痣が出ている。

それはまるで汚らしい虫が這った跡のような痣。誰も思わず目を背けたくなる。

リリーさんは俺の手の泡を流すと、タオルで拭き、痣の上に包帯を巻き始めた。

「怪我じゃないよ?」

痛くないし、と言うと、彼女は緩く頭を左右に振った。

「痛いのでしょうか? 心が…」

ああ、そうかもしれない。
他人事のようにそう思った。

「ソレンティアにはいつ戻るの?」

「ソレンティア?」

「戻るのでしょうか?」

「あー。……ああ」

億劫だな、と思ってしまった。

あそこは楽しいところだけど、楽しすぎて、なんだか眩しい。暗く、人目を避けられるこの森の中にいることが、今の俺には相応しいように思えた。

祖父がそうやって生きて、そして、死んでいったように。

「ダメよ！ この屋敷から追い出すわよ。」

屋敷の鍵は私が持っているんですからねっ」

「俺が相続したのに？」

「関係ないわ」

いや、あるだろう…。

ツツコミ切れなくて、なんだか笑ってしまった。

そんな俺を見て、リリーさんもフツと表情を和らげる。

どうするの？ と首を傾げてきた彼女に俺は真顔になって。

「今の状態でソレンティアには戻れない。」

調べたいことがあるんだ」

「調べたいこと？」

「マスターなら何か知っているかもしれない」

「マスター？」

こくん、と頷く。

そして脳裏に思い浮かべるのは、恩師のこと。

ジルベルト・ラファエーレ・バルバート。

聖ハギオス神学院で俺の担当教官をしてくれた人物だ。

「彼に会わなきゃいけない気がする」

5 ・それは記憶の欠片たち

遠くに鐘の音が聞こえる。

それは始まりの音。

その音を、俺は校舎裏のゴミ箱の上に腰を降ろして、ひとりで聞いた。

（ここは嫌いだ。

こんなところに来るつもりはなかった）

そう思い、天を仰ぐ。

青空を塞ぐように高く大きな校舎が広がっており、その棟の一番高い塔のてっぺんに、大きな金色の鐘が下がっている。

その鐘が再び鳴り響いた。

そして、もう一度。

本当なら、友人たちと同じ学校に通うはずだった。そして、一緒にたくさん遊ぶはずだった。

そう思えばこそ、

この場にいることを強要されている自分が許せなかった。

（悔しい）

幼くて力のない自分は、祖父の言うとおりにするよりない。

反対されれば、諦め。

賛成が得られなければ、やはり諦めるしかない。

そうしろと言われたことだけをこなす。

聖ハギオス神学院。

その初等部への入学も、その延長線にあった。

祖父に命じられなければ、俺がこんな学校に入学するわけがないのだ。

「君……」

声を掛けられたことに気が付いたのは、鐘の音が止んだ後だ。
低く響いたその音に被って、聞き取ることができなかったのだ。

「君、新人生ですよね？」

「……」

「鐘の音が聞こえませんでしたか？」

入学式は始まっていますよ。講堂に向かいなさい」

「……」

「君……」

答えない俺に、声を掛けてきた男は更に近付いてきて、呆れた様子で、俺の顔を覗き込んだ。

「……君は……。もしかして……」。

ヴィッツ・エルヴィンの孫の、ベルタ・エルヴィン？」

「……なん……っ」

なんで？ と言い掛けて、俺は顔を顰めた。

口を利いてやるつもりはなかったのに、思わず声を発してしまった。

すると、もういいや、という諦めの気持ちが湧いてくる。
俺は男を睨み付けながら、ぶっきらぼうに言った。

「なんで俺のジジイのこと知ってるんだ？

……っーか、あんた、誰？」

彼は淡く微笑んだ。

「わたしは、ジルベルト・ラファエーレ・バルバート。
君の担当教官です。」

以後、わたしのことは“マスター”と呼びなさい」

「君ね…」

呆れ声に俺はますますふて腐れた。

「元気なのは構わないけれど、暴力は良くありませんね」

「相手が先に殴ってきたんだ」

「殴られるようなことを言いませんでしたか？」

「殴りたくなるような言葉を、俺に言わせた相手が悪い」

「君ね…」

ため息をひとつつくと、ジルベルトは、
俺の赤く腫れた頬に片手を当てて、魔法を唱えた。

みるみるうちに痛みが引いていく。

「マスター、今のは？」

「サナスです」

「サナス？」

「魔法です」

「魔法？」

「わたしはソレンティアの卒業生ですから」

「ソレンティアって、何だ？」

「そこからの説明が必要でしたか…」

そして、聞かされた魔法学校の存在。

異世界の話は、6歳児の心を強く惹き付けた。

「俺もそこ行きてえー」。

きっとここより合っている気がする

「そうですね…。」

君はまずその言葉遣いからして、ここが合っていないからね」

「ソレンティアを卒業しないと、魔法使いになれないんだよね？」

「ええ。卒業して、自分の世界で魔法を使う許可を得なければ、たとえ、ソレンティアに在学中に会得した魔法であっても、自分の世界では使うことができません」

「…っていうことは、俺のジジイもソレンティアの卒業生か」

俺が独り言のように言うと、

ジルベルトが瞳を瞬かせたので、俺は言葉を付け足した。

「前に、……たぶん、魔法だったと思うんだけど、
掛けられたことがあって……。」

ジジイに頭を触られて、パアツと熱くなったんだ。

そしたら、それから、誰かを殴ったり、蹴ったりできなくなった

……」

「え……」

「殴ろうとするんだけど、拳が止まっちゃうんだ。
見えない壁にぶつかるような感じがして。
それで、力が萎えちゃうんだ。」

……だから、俺、殴ってないよ？」

蹴ってもいない、と言うと、
ジルベルトは怪訝そうに眉を顰めた。

「しかし、相手は怪我をしたのでしょうか？」

「だから、椅子を投げ付けたんだ」

「……………」

「マスター！ サナスかけてーっ」

ノックもせず扉を開いた俺に、ジルベルトは顔を顰める。

「またですか？」

「俺、聖歌隊やめるー」

「それはまた…」

「もう飽きたんだよっ」

強く言い切った俺にジルベルトは更に顔を顰めた。

そして、腕を伸ばして、

俺の額や肩、腹に負った痛みを魔法で消してくれる。

「サナスは心には効きませんので…」

「大丈夫。そこは痛くないから」

「本当ですか？」

「…………俺」

「はい」

「俺、…………音痴なんだって」

「…………」

「声が汚いって。俺が唄うと、みんなの耳が腐る……って」

「……………そうですか」

「…俺、聖歌隊やめてもいい？」

おそろおそろ尋ねると、
ジルベルトは机に頬杖を着いて、僅かに怒った様子で答えた。

「君の好きにして下さい」

「マスター、それ何？」

「粘土です。触ってみますか？」

「……………手が汚れそう」

「後で洗えばいいんですよ」

「うまく作れないかも」

「何かを作ろうとするからいけないんです」

「じゃあ、なんのために粘土を触るんだ？」

「触り心地が良いからです」

「……………そういつもん?」

窓枠に頬杖を付いて、俺は外を眺めていた。
ふと、ジルベルトを呼ぶ。

「どうしましたか?」

「あの人、誰だろう?」

「どちらの方ですか?」

窓の外を指差すと、ジルベルトは、ああ、と納得する。

「あの緋色の衣の方ですね？」

「そう。あの赤、すげえ鮮やかで目を引く」

格好いい、と言うと、ジルベルトは同意して頷いた。

「彼はカーディナルです」

「それ名前？」

「いいえ。教皇に次ぐ高位聖職者の称号です」

「へえ」

都にいるべき者が何の用で学院まで来たのだろうか、と尋ねると、ジルベルトはまるで他人事のように淡々と答えた。

「わたしに会いに来たのです」

「は？　なんで？」

「カーディナルに推挙して下さるそうで。
今日はその前の面談でしょう」

「はあ？　推挙？」

「空席ができたとかで……」

「マスター、それって、すごいことなんじゃ……？」

「そうですね……」

「……もしかして、嬉しくない？」

俺の言葉にジルベルトは少し考え込む仕草をした。
それから、うーん、と低く唸った。

「嬉しくないわけではないのですが、
今はまだ時期ではないような気がします」

「時期？」

聞き返したが、ジルベルトは答えなかった。

仕方が無く、俺は再び窓の外に視線を向ける。

鮮やかな赤。

光沢のある衣は、陽の光を受けて、黄金色の反射光を放つ。

「かけえー」

「そうですね」

独り言のつもりで口にした言葉に、ジルベルトが応じた。

彼はいつの間にか俺の傍に立ち、同じように窓の外を眺めている。

「この道に踏み入れた者としては、あの衣は憧れです」

「いつか着てみたいってこと？」

「そうですね」

「俺も……憧れる……」

「そうですか？」

「うん…。あの赤に…」

「マスター！ 俺、妹ができた」

「妹ですか？」

「セレナって名前なんだ。俺が名付けた」

「月に由来する名前ですね」

「そうなんだ。綺麗だろ？」

俺は嬉しくなつて更に報告した。

思えば、家族ができたことに、はしゃいでいたんだと思う。

「俺の母親の名前は、ティーダっていうんだ。

それから、父親の名前は、ラクティスっていうんだって」

12年ぶりに会った母親が教えてくれた両親の名前。

祖父は俺の両親の話を避けようとしていたし、

その名前さえも俺には教えてくれなかった。

祖父はまるで俺の両親など存在していないかのように振る舞っていた。

「ティーダが君に会いに来たのですか？」

「そうなんだ。妹を抱いて……って。

マスター、俺の母親のこと知ってるの？」

「いえ。……少しだけ」

ジルベルトの表情に迷いの色が浮かぶ。

何か言い掛けて、口を閉ざし、

やはり思い直したのか、再び口を開いて、閉じた。

「なんだよ…？」

「いえ、その…」

「マスター？」

「……言いますけど、怒らないでくださいね？」

「は？」

「じつは、ラクティスとわたしは、ソレンティアで共に学んだ仲なのです」

「は？」

「つまり、友人ということになりますね」

言う前はあれほど躊躇したくせに、一度口を開けば、他人の話をするかのように、ジルベルトは言っただけのけた。

「なっ。なんで今までそれを内緒にしていたんだよっ！」

怒鳴った俺に、ジルベルトは視線を俺から逸らす。

「君が父親に思うことがあると察していたので…」

「思うことがあるも何も。俺、産まれてから一度も会ったことないし！」

ジジイからは、ジジイのことも俺のことも捨てた最低なヤツとしか聞いてねえーよ!」

「やはりそうでしたか…」

「……………で？」

気持ちを落ち着かせ、俺はジルベルトに問いかける。
何ですか、と振り返ったジルベルトに俺は続けた。

「俺の父親って、どついうヤツ？」

ソレンティアで学んだってことは、魔法使い？」

「ええ、ラクティスもソレンティアをちゃんと卒業しましたから。なかなか優秀な成績でしたよ。わたしよりもです。

ラクティスもここに就職していたら、

今ごろ、わたしと院長の座を競っていたかもしれませんね」

しかし、とジルベルトは続けた。
声のトーンがやや下がる。

「彼は、彼の父親に逆らいました。
君のお祖父様は、ラクティスが聖職者になることを望んでいたのです」

「知ってる。それが嫌で逃げたんだろう？
んで、ジジイは代わりに俺を聖職者にさせようとしている」

罪がどうの。

許しを請えだの。

6歳の孫に意味不明なことを言い聞かせ、
聖ハギオス神学院に放り込んだのだ。

直に初等部を卒業する年齢になったが、

その時の祖父の言い分は、今、思い出しても納得できない。

（許しつて、なんだよ。

いったい誰に請えばいいんだ！

俺が何か悪いことしたのかよっ！）

興味なんてさらさらない神学を学び、

その救いなんてサッパリ期待していない神さまに祈つて。

「ジジイも意味分かんないヤツだからさ」

結論はいつもこれ。

そう言つて、俺はジジイについては諦めることにしている。
ところが、ジルベルトは言葉を紡いだ。

「君のお祖父様、ヴィッツ・エルヴィンは、
ラクティスやわたしなんか足下にも及ばないほど優秀だったと
聞いています」

「ソレンティアで？」

「ええ」

「だから、マスターは俺のジジイのことも知ってたんだ？」

初めて出会った時、

“ヴィッツ・エルヴィンの孫の、ベルタ・エルヴィン？”と言われた。

ラクティスの友人であるのなら、普通、

“ラクティスの息子の、ベルタ・エルヴィン？”と尋ねるところだ。

「ジジイって、そんなに優秀だったんだ？」

信じがたいことだった。

俺の知っている祖父は、人嫌いで、

暗い森の奥で独りで暮らしているような人物だからだ。

面白い冗談なんて言われた例しはないし、

それどころか、口を開けば、命令ばかりしてくる。

難問を解いているかのように、

眉間に皺を寄せた俺を横目にして、ジルベルトはポツリと零した。

「いつか君もソレンティアで学ぶことになるかもしれないね……」

6・變つて、何なんだろうな

白。

ローブから靴まで、すべて白。

それがここの制服だ。

6歳に入学して、

18歳になる直前まで通った学校を、

俺は仰ぎ見るように眺めた。

久しぶりのはずの場所なのに、

そこは何一つ変化が無くて、

あの時間の延長であるかのような錯覚に陥る。

けれど、俺は今、

白すぎる制服を身に着けてはいない。

白い群れの中に異色が紛れている様子は、
誰が見ても明らかだった。

いくつもの視線を感じながら、校内を歩く。

在学中、何度も歩んだ廊下を進んでいると、
ふいに声を掛けてくる者がいた。

誰かと思い、振り返ると、
よく知った顔が、やっぱり、という表情をつくった。
そして、俺を指差して、ゲタゲタ笑った。

「やだ！ 何その頭！！！」

約2年ぶりの再会だった。

……だというのに、この女、ゲタゲタ笑いが止まらないでやんの。
若干、腹立ちながら、不服そうに言ってやる。

「親愛なるギゼラ。

久方ぶりの再会にはまず笑いよりハグだろう」

「はいはいはい」

小刻みに震える体がガシツと抱きついてくると、
俺も抱き返して、すぐに離れた。

「で？ 染めちゃったの？」

「気分転換にな」

「またスゴイ色ね」

「綺麗だろ？」

「そうね。」

でも、貴方の髪、キラキラしてたのに」

「気に入らないか？」

「勿体ないわ」

「勿体ないを、捨ててみたかったんだ」

「……そう」

俺が歩みを進めると、

ギゼラは身に着けた純白のローブで風を切りながら付いてきた。

「院長室に行くの？」

「院長室にいるかなあ」

「いると思うわ」

ジルベルト・ラファエーレ・バルバートのことだ。
彼は俺がソレンティアに入学する少し前に、
聖ハギオス神学院の学院長に就任している。

「きつと貴方のその頭を見たら、驚くと思うわ」

「怒られると思うか？」

「どうかしら？」

何色にも染まっていない。

何の罪も犯していない。

制服の白は、そういう意味を持つ。

対して、俺は、

たぶん、もう、ドロドロだと思う。

ギゼラは、俺がソレンティアに行くを決める少し前に、
俺の赤く腫れた頬を見ながら、ばやいたことがある。

「愛って、何なのかしら？」

その言葉を、

俺はソレンティアで何度か思い出すことがあった。

「愛って、何なのかしら？」

あと3日で、18歳の誕生日を迎えるっていうのに、

貴方はちっとも成長がないのね、と、

ギゼラは散々言ったあとで、ばつりとそんな言葉を零した。

「は？」

彼女の意図が分からず、俺は聞き返し、
数時間前に別れた彼女に拳で殴られた頬に、冷やした布を押し当て
る。

「貴方を見ていると、つくづく思っの。
愛って、何なのかしら？」

「慈しみの心だろ？」

教典の言葉通りの答えを返してやると、
ギゼラは眉を寄せた。

「でもね、ベルタ。
“愛”が“慈しみの心”だとしたら、なぜ貴方はあの子に殴られ
たの？」

「そりゃあ、もう愛がないから殴ったんだろっ」

「……なるほどね」

納得の言葉を口にしたものの、
ギゼラの顔は明らかに腑に落ちていない。

「貴方はあの子を慈しんだ？」

「それなりに……。たぶん」

「随分と自信なく言うのね」

「だってさ」

俺はギゼラに向かって肩を竦めて見せた。

「俺も“愛”って、よく分かんねえし」

愛には、4つの種類がある……………らしい。

聖ハギオス神学院では、
その4つのうち“アガペー”と呼ばれる愛を、
もっとも尊いものとし、この愛のみを抱くよう生徒たちに教える。

それは、無条件の愛。

万人に平等で、けして見返りを求めない愛である。

だから、教師達は言うのだ。
特別な誰かを作ってはならぬ、と。

教師達が忌む愛というものがある。

“愛”とはそのすべてが素晴らしいものではないことを、
生徒達は教え込まれる。

つまりは、“エロス”と呼ばれる愛がある。

肉体的な愛。

主に男女関係の愛であり、

それは自分本位の愛であり、見返りを求める愛だとされる。

“誰か”がいて、初めて生まれる愛であり、

その愛を知れば、自分もまた同じだけ愛されたいと欲する。

そして、満足に達するほどの見返りが得られない時、人をどこまでも残虐にすることのできる愛だ。

…だとすると、

彼女に殴られたのも、エロスの愛の表れだったのかもしれない。

そんなことを、その当時、思ったのを覚えている。

「愛って、何なんだろうな…」

「え？」

突如としてボヤいた俺に、

ギゼラは歩みを止めて、怪訝な顔で振り返った。

「何、突然。また誰かに振られたの？」

「まあ…。なんつーか」

「いいわね。」

ソレンティアで大いに羽を伸ばすことができて

「こう見えても、いろいろあつたんだよ」

「そうよね。髪を染めてしまっくらいなものね」

「そんなにこの色が気に入らないのかよ？」

「貴方じゃないみたいなんだもの」

「髪が違っただけだろ？」

「瞳が濁ってる」

「濁ってる？」

「自由に好きなことをやっているはずなのに、
ちっとも幸せそうじゃないのね。」

貴方がソレンティアに行くが決まった日、

私、ここを出て行ける貴方が羨ましかったわ。

でも、今、貴方を見て、少しも羨ましくないの。

……私、たったひとりの“特別な人”なんていない」

「ギゼラ？」

「私の愛は“アガペー”だけでいいもの」

「俺は……」

ギゼラにつられて立ち止まっていた足を、再び歩みさせる。

「俺は、“ストルゲー”や“フィーリア”も大事にしたい」

ストルゲーは敬愛。

“誰か”を尊敬し、従う愛。

親子関係や師弟関係にある愛のことだ。

フィーリアは友愛。

自分と好みを同じとし、
共通の場や目的のある“誰か”に対する愛。

自分を与えることで他人を生かす愛である。

「特別な誰かを作ると、平等ではいられなくなるわ」

「分かってる。……けど、ギゼラ。」

俺は幼い頃から自分の祖父が怖ろしくて、嫌いだったんだ。
両親のことも……憎んでる。俺を捨てたから」

「……」

「人を憎むことを知っている俺は、そもそも、
万人に平等ではいられないんだ」

憎む人がいる。

どうしてもその人を愛せない。

そう告白すると、ジルベールはこう言った。

「それなら、

憎む人の数より多く、人を好きになりなさい」

けして、嫌いな人の方が、

好きな人よりも多くなつてはいけないよ、と。

だから、と言って、俺は歩みを止めた。
院長室の扉は目の前だ。

「俺の愛は“アガペー”ではないのかもしれない。
そうであるように思っていたし、
そうであるかのように振る舞うけれど」

「……」

「でも、結局、愛って、何なんだろうな」

「……そうね」

「ドロドロに溶けたチョコレートなようなもんだったりしてな」

「何それ」

ギゼラはケラケラ笑った。

「甘党には堪らないわけね」

「俺はよく」

“フィーリア”と“エロス”の狭間で、ドロドロになる」

「知ってる」

「普通の恋人は、“フィーリア”よりも“エロス”を優先するんだろうな。」

俺はその逆をしてしまうから、ダメなんだろうな……」

「よく分からないわ」

「憎んでいたけど、両親みたいに、相手だけが必要で、相手以外はすべてを捨てられるような、そんな特別な誰かがいるっていうのに、憧れる」

「……そう」

ギゼラの手が、俺の腕を軽く叩いた。

「それじゃあ、私はこれで」

「ああ。会えて良かったよ」

「私も。すぐにソレンティアに戻るの？」

「そうだな」

「そう。……またね」

「ああ」

ギゼラに微笑むと、俺は院長室の扉を叩いた。

7・力ある者の悲劇

院長室の扉を叩くと、

かなりの間があつてから、返事が戻ってきた。

彼にはよくあることなので、

俺は気にすることなく、院長室の中に入った。

「お久しぶりです」

「お久しぶりですね、ベルタ」

真紅のローブを纏ったジルベルトが大きく両腕を広げた。

俺はその腕の中に静かに収まると、しばらくしてから離れた。

「聞きたいことがあるんです」

「それで戻ってきたのですか？」

「いえ、祖父が亡くなったので……」

「え……」

ジルベルトの瞳が大きく見開かれる。
そして、彼は極々小さな声で呟いた。

「ヴィッツ・エルヴィンが……死んだ……？」

その小さすぎる呟きに気付かず、俺は続けた。

「祖父から、彼の遺産をすべて受け継ぎました」

「遺産……？」

「はい。土地や家はもちろん」

個人の財産がプラスであるとは限らない。
もし受け継ぐべき遺産が負債ばかりだとしたら、
それを拒否する権利が遺族には残されている。

ただし、ひとつを拒否するのであれば、
すべてを手放さなければならぬ。

そして、その逆も然りだ。

俺は袖をめくった。

袖の下には黒々とした醜い痣。

それをジルベルトの方へと向けて、彼の言葉を待った。

しかし、彼は無言だった。

痣を凝視し、硬く唇を結んでいる。

「マスター？」

「……」

「教えてください。」

祖父はいったい何をしたんですか？」

それは、誰かに聞きたくて堪らず、

けして誰からも聞きたくなかったこと。

あまりにも恐ろし過ぎて。

眠り森に所有する広大な土地。

暮れ森にある家も、けして小さくはない。

生まれてこの方、お金で不自由したことはなく、
それなのに、その金がどこから湧いて出てきたものなのか、俺は知らない。

ただ一つ、察することができたのは、
祖父は過去に何かをし、

その報酬が、それら金や土地であったことだ。

そして、祖父はそのことを悔い、
また、それを罪だと思い、その許しを請うようと、
俺を聖職者させようとしていたということ。

「マスターは以前、俺に祖父の話をしてくれました。
ヴィッツ・エルヴィンは優秀だった、と。
知っていること、すべてを教えてください」

「わたしが知っていることは、わずかです」

「そのわずかを知りたいのです」

「……」

しばし見つめ合ったあと、

彼は、そうですね、と吐息を漏らした。

「そう…。」

ヴィッツ・エルヴィンは優秀な魔法使いでした。
そして、優秀と呼ばれるほどの力が悲劇を招きました」

「……」

「あなたは、アルカウムという国を知っていますか？」

「アルカウム？」

知らないはずがなかった。

それはダークエルフの国であり、

エルフの国・アルヘイムは、1000年ほど昔、

この隣国と、大きくて悲惨な戦争を行っていたからだ。

その悲劇を教える教科書は、

アルヘイム国のどの学校にも広く使われているため、

その事実を知らない者は、幼子とていない。

そして、誰もが知っているもう一つの事実がある。

この二つの種族の戦争は、力での決着は付かず、

同盟を結ぶことで、平和を得たことである。

同盟。

両者の信頼で保たれている平和。

それが脆いものであつてはならないと、
アルヘイムでは、子どものうちから戦争の悲惨さと、
平和の尊さを学ぶよう義務づけられている。

「アルカウムが如何されましたか？」

「アルヘイムとアルカウムの境に2つの谷があります。
ひとつはアルヘイム側にある“響き谷”という谷です。
そして、もうひとつはアルカウム側にあり、
その地に風が吹き抜けると、
その風がまるで女の嘆き声のように聞こえることから、
“嘆き谷”と呼ばれる谷です」

「嘆き谷…」

ぞくりつと背筋が冷えた。
俺は痣のある右腕を、己の手でさすった。
ジルベルトは続ける。

「この2つの谷に棲む者たちは、
互いの種族を尊重し、平和を強く願い、
そして、それらを行動で示していました。
響き谷の領主フリーユーゲルは妹を、
嘆き谷の領主ドレイクの息子に娶せたのです。
しかし、これを良く思わぬ者たちがいました」

「良く思わぬ…者たち……？」

「ええ。人の考え方は、一見同じのように思えても、人の数だけ異なった考え方が存在するものです。

つまり、アルヘイムすべてのエルフが

アルカウムとの平和を望んでいるわけではないということです」

「戦争を望んでいる者がいるという意味ですか？」

ジルベルトは頷いてから、すぐに頭を横に振った。

「そういう者も確かにいるでしょうが、

少し語弊があるので、言葉を変えましょう。

……世の中にはね、ベルタ、食事を取る時に、

自分の席の隣の者が浅黒い肌をしていたら、

食事が不味くなると言う者もいるのですよ」

意味を捉えかねて黙っていると、

ジルベルトは更に言葉を変えた。

「ベルタはソレンティアでダークエルフを見ましたか？」

「え、……はい。何度も見ました。

数人ですが、話したこともあります」

暮れ森にも眠り森にもダークエルフはいない。
そのため、俺はソレンティアに入学するまで、
ダークエルフを見たことがなかった。

「彼らを見て、どう思いましたか」

「どうって……。肌が黒いなあ、とか。

ゴシゴシ洗ったら白くならないのかなあ、とか。

あとは、うーん……」

初めてダークエルフを見た時のことを必死に思い出す。
あの時、自分はどう思っただろうか。

ネコ耳やウサギ耳を生やした人たちを初めて見た時、
俺は「可愛い！」と叫んだ気がする。

あの耳は、あの尻尾はどうなっているのだろうか、と。

だが、ダークエルフを見た時に、
可愛いと叫んだ覚えはなく、
ただ、ただ、その肌の黒さにギョッとしたのだ。

「つまり、そういうことなのです」

ジルベルトは静かに頷くと、続けた。

「君が感じた驚きを更に大きく、
また強くすれば、それは畏怖となります。
自分とは異なる者への恐れ
自分には理解できない者への嫌悪。
それらを心に抱いた者たちの憎しみが
すべて嘆き谷に、刃となって向かいました」

「……いたい……」

「それは一瞬の出来事でした。
たったひとりの魔法使いがひとつの呪文を唱えたために、
その谷に棲むダークエルフたちは皆、地に伏し、
そのまま死に絶えてしまったのです」

「……」

まさか、という思いがそのまま顔に出る。
その俺の顔を見つめながらジルベルトは続けた。

「ヴィッツ・エルヴィンを優秀だと言った所以は、
彼が2つの魔法を使いこなせるからです。
ひとつは、一瞬にして大勢の命を奪う魔法です。
そして、もうひとつは、奪った命を操ることのできる魔法です」

「……それは」

「そう。禁忌です。
ソレンティアの『基礎魔法大全』に掲載されている

『禁則魔法について』に触れる魔法です。
しかし、ヴィッツ・エルヴィンは“死者を蘇らせる”ことも、
“死者を支配する”こともできました」

息を呑んだ俺の表情を確認しながら、
ジルベルトは更に続ける。

「嘆き谷のダークエルフたちが死に絶えた翌日、
その谷にあったはずの多くの屍が消え去りました。
それから後、隣接するエルフの村々がオーク（魔物）に襲われま
した」

「オーク……」

「1000年前の戦争で、
禁忌魔法が使われたことを、君は知っていますか？
その魔法は、殺したダークエルフの屍をオークに変え、操るとい
うものでした。

アルヘイムの魔法使いに操られたオークは、
元は自分の親、兄弟、子であり、仲間、同朋であったダークエル
フたちを

次々に襲い、殺していったのです」

「…その魔法が使われたっていうことですか？」

なんていう魔法だろうか。
なんて恐ろしい…。

そして、その魔法の使い手は……おそらく。

「俺の祖父が…」

「禁忌を犯せば必ず報いを受けます。

彼が受けた報いとはおそらくその痣…」

「痣…？」

俺は己の腕を見下ろした。

痣。それは、右手のひらから手首にかけて、
右腕、左肩、首に届くまで、ずっと広がっている。

黒々と。

そして、恐ろしく醜い。

「その痣について調べたことがあります。

それはただ醜いばかりの模様ではなく、
アルカウムで昔使われていたという文字なのです」

「文字？」

驚く俺の右手をジルベルトはその手に取った。

「ええ…。間違いありません。これは呪詛です。

君を脅すのは本意ではありませんが、
この呪詛は、君の負の心を餌として大きく成長していきます。
そして、やがて君を闇へと呑み込むでしょう」

8 父と子と憎しみと

改めて、自分の右腕を見下ろした。
その醜い痣を。

「…っ」

祖父の遺産。

……………これが…。

これまで自分を育ててくれた彼の私財が、
多くのダークエルフを殺し、その屍を操って手に入れたものだとし
たら、

当然、その報いである痣は、俺が受け継ぐべきものなのだろう。

だけど、なぜ、と思う。

そうするべきなのだと分かっているけど、なぜ、と迷ってしまう。

なぜ、祖父は自分の死と共にその報いを
持ち去ってくれなかったのだろうか。

なぜ、俺にそれを受け継がせたんだろう。

俺の考えを、その表情から読んだジルベルトが、
祖父の代わりに答えてくれる。

「その痣は呪詛です。無念に死んだ者の呪いなのです。痣の宿主が死んだからと言って、

無念が消えて無くなることはないのです。

そのため、宿主が死ねば、呪詛は実体化し、兇悪なオークとなり、エルフたちを殺すと、ここに書いてあります」

ジルベルトが俺の腕に人差し指を滑らせる。

「それを防ぐためには、

宿主は死ぬ前に、その痣を他者に渡す必要がある、と」

「なるほど…な」

我ながら、嫌な笑い方ができるもんだと、驚いてしまう。両親、とくに父親を思い出すと、いつもこんな風だ。普通ではいられなくなってしまう。

「俺の父親は、この痣を受け継ぐのが嫌で、逃げたわけだ？自分の身代わりに俺をジジイの元に置き去りにして、愛する女と逃げたわけだ！」

「……………」

「だからっ。俺がっ。俺がこんなものをっ！」

「ベルタ、やめなさいっ。」

その痣は君の負の感情を餌に成長しますっ！

だからっ、君のお祖父様は、君が心穏やかに生きられるようにと」

「聖職者への道を歩ませたと？」

ジジイは最初っから俺に

自分の罪を押し付けるつもりだったってことじゃないかっ！

俺が産まれたときからずっと、ずっと、そうするつもりだったんだ！

俺の意思は？ 俺の人生は？ 俺は何！？」

なぜ俺なんだ。

なぜ俺は逃げられないんだ。

なぜ俺がこんなものを…。

俺が禁忌を犯したわけじゃないのに。

死にたくない。

死にたくない。

怖い。嫌だ。…気持ち悪い。

「なんで、ジジイは、そんな魔法を使ったんだ？

ソレンティアで学んだのなら、禁忌だと分かっていたはずだ。

それでも使ったのはなんでだ？」

はっとなる。

自分の顔が青ざめるのが分かった。

「……金か…」

その呟きを聞いたジルベルトも青ざめる。

「ベルタ、違います。」

君は君のお祖父様のことを知らなさすぎます。

彼はそのような人物ではありません」

「知らねえよっ！」

俺、ジジイとはほとんどしゃべったことねえし！」

眠り森の、あの薄暗い屋敷に独り、
閉じ籠もるように生きていた祖父。

俺は物心が付いた頃からずっと、
暮れ森の家に独りで暮らしていた。

祖父と話すのは、年に一度あるか無いか。
一方的に祖父に呼び出され、命令をされる時のみ。
それは「話す」という行為とは程遠い。

ことん、と音が響いた。

見やると、ジルベルトが机の引き出しから2つの小瓶を出し、

それを己の手のひらに乗せ、俺の方へと差し出していた。

「知りたいと思いませんか？ 君のお祖父様のことです」

「え…」

「この瓶の中は幻薬です。

トキホタルの光液から作った物で、時を渡ることができます」

「それは…。過去に行けるってことですか？」

「はい。こちらの瓶には過去へ行ける幻薬が、

そして、こちらの瓶には未来に戻る幻薬が入っています。

過去に行き、お祖父様を知ることができれば、

もしかしたら、お祖父様に禁忌魔法を使うよう命じた者が分かる
かもしれません」

「魔法を使おうとするジジイを止めることも」

できるかもしれない、と俺は呟いた。

それに対するジルベルトの否定の言葉はなく、

彼はただ、2つの小瓶を俺の手に握らせた。

そして、彼は、

俺の左肩、そして首もと、右肩へと手をかざして、サナスを唱えた。
暖かな光を受けて、俺は吐息を漏らした。

「ベルタ、見てみなさい。
痣が薄くなっただでしょう?」

鏡を差し出されて、俺は自分の姿を確かめた。
たしかに、左肩や首もとの痣は薄くなっただよに見える。

「回復魔法ですべてを消すことはできませんが、
回復魔法を掛けられている時、また君が回復魔法を掛ける時の気
持ち、

そこには慈愛があります。
その慈愛は憎しみが源である痣を薄くすることができなのです」

どうか、そのことを忘れずに、とジルベルトは続けた。
俺は彼に頭を下げると、2つの小瓶を握り締めて、院長室から去っ
た。

ソレンティアに戻るために…。

ベルタ・エルヴィンが去った院長室に、
再び、ジルベルト以外の者の声が響いた。

否。

それはジルベルトの声だった。

「君…。」

君がわたしの姿になるのは、今日限りですよ」

「なぜだい？ 随分とケチくさい」

「ケチ？ ひどい言いぐさですね。」

わたしのことをケチだ何だと言っ前に、
君は自分の息子の前に、自分の姿で立ってみるべきです」

「嫌だね。わたしはあの子に嫌われている。
いや、憎まれている」

「その憎しみを受け入れてあげることが、
君ができる唯一の父親の努めだと思いますが…」

なんと言っても、彼は自分自身のために、
息子を犠牲にして逃げた過去があるのだから。

「何にせよ、
あれだけの量のトキホタルの光液を集めるのは、
苦勞したでしょう？ 君も、ティーダも」

「ティーダには本当に苦勞を掛けてしまった。
悲しい思いも…」

「分かっているのなら、一刻も早く彼女を我が子の元へ走らせてあげるべきですね。

君のために、息子のために、と、

トキホタルを探して、何年もアルヘイム中を巡っていたのですから」

「そうだな……」

溜息がひとつ。

重々しく部屋に響く。

「とにかく、早く変身魔法を解いてください。

鏡に向かって独り言を言っているようで、気持ちが悪いです」

「……」

「君は愚か者です、ラクティス」

「知っている」

「その愚か者にひとつ助言です」

「……」

「君はまずお父様の墓参りをするべきです。

亡くなってしまったのでしょうか？」

ならば、その墓の前で涙するのが、一人息子としての君の努めで

す」

「…そうだな。

人は許しを請い、許されて、

許しを請われ、許して、そうして前に進んでいくものだからな」

「ええ…」

ジルベルトが頷くと、彼は彼の姿に戻って、軽く片手を上げ、感謝の意を示すと、彼の息子同様に、院長室から去っていった。

9・汚いわけじゃなくて、思い出が詰まっているんだよ

戻ってきた。

…そう思うのは、
ここでの暮らしが長くなってきたからだ。

いつの間にか、部屋には小物が増えたと思う。
入学して数ヶ月くらいまでは、
物を増やさないように気をつけていたのを覚えている。

いつでも去れるように、と。

物が、ひとつ。

またひとつ、そうやって増えていくたびに、
心がこの部屋に縛られていく。

それは、
いつか必ず来るであろう、ここを去る日の心残り。
そして、それまでの思い出と、
ここで出会った人たちの心そのもの。

大切な物が増えるたびに、
ここを去りがたくなっていくのを感じてきた。

小物で溢れた部屋は、
もうこの場所を簡単には捨てられないという気持ちの表れ。

もつとも、それは、
俺が部屋を片付けないことの言い訳にはならないのだが。

「突撃！！ 隣の友人宅！！
……ってことで、ベルにゃんおかえりiiiiiiiiiiii！！！！
部屋汚あああああああ！！！！！！」

ハッと振り返ると、
振り返る前に予測していた通りの人物が立っていた。

「うるせえーーーーっ。叫ぶなっ。聞こえる！
つか、今日の俺の部屋は、まだマシな方だ！！！！」

そもそも数時間前まで部屋を空けていたのだ。
散らかしようにない。

「もう少しちゃんと掃除しないと、Gがわいてくるよ?」

「大丈夫。この部屋で食い物は食ってないからさ。
散らかっているのは、プリントや漫画が多いからなんだよ。
あと、服。」

あゝ、その服は洗濯してないヤツだ。触るな」

「一体何日洗濯してないのか問いただしたのですが…」

いかにも“ばばっちい物”を見る目で、
俺の衣服を睨み付ける彼……いや、彼女(?)に振り返って、
俺は、ところで、と口を開いた。

「お前、今、暇?」

「掃除はしてあげませんよ」

「いや、そうじゃなくて」

「遊んでもあげません」

「俺も遊んでいる場合じゃないので」

「なら、何ですか？」

訳が分らないと、首を傾げる相手に、俺はジルベルトから貰った2つの小瓶を見せた。

「俺、今からこれを飲むんだ。
自分で作った幻薬じゃないから、どっいつ風になるのか分からない。
い。」

だから、お前、ちょっと見ててくんない？」

「それは女性化の幻薬ですか！？ ついにベルにゃん……」

「ちがー……………うっ……………！」

すかさず全否定。

「とにかく、俺の部屋にいてろ。」

暇過ぎたら、掃除してていいから！」

わかったにゃー、とか、

にゃーにゃー言っている相手を横目に、

俺は自分のベッドに腰を降ろし、小瓶の蓋を開けた。

一気に飲み干す。

味は………うーん。甘いような、苦いような、
しゅわしゅわと、炭酸が入っているような…。

そんなことを思いながら、ベッドに体を沈めた。

「きゃあっ」

「え……」

女の子の悲鳴で覚醒した。

一瞬、あの隣人がふざけた声を出したのかと思ったが、目の前の少女は、たしかに“少女”で、翡翠のような瞳を大きく見張っている。

「あなた、誰？　今、どこから現れたの？」

「え……っと」

俺はベッドから上体を起こして、辺りを見渡した。明らかに自分の部屋ではない。

家具も、その配置も違っているし、

何より俺の部屋にはいっさい無いはずの薬品がたくさん並んでいる。

しかし、汚い。

書き殴ったメモ紙が丸められて、たくさん落ちている。

「どうしたの？　具合悪いの？」

声を掛けられて、俺は再び少女に視線を向けた。

「ええつと、ここは……。どこだろうか？」

「ここ？ ティファレト寮よ。」

男子寮の405号室。知らないで、ここに寝ていたの？」

信じられない、と少女の瞳が大きくなる。

「新入生なの？ なら、なんて運の悪いの。
ここが誰の部屋なのか知らないで入ったなんて」

本当にここがティファレト男子寮405号室なら、それは俺の部屋だ。

だけど、目の前の少女はそうではない口ぶりで話す。

それでは、いったい誰の部屋だと言うのだろうか。

とりえあえず、俺は名乗ることにした。

ただし、この少女が何者なのか分からないので、ファミリーネームは躊躇われた。

だから、不自然にならないように名乗る。

「俺はベルタ。君は？」

「ここは誰の部屋なんだ？」

「僕の部屋だ」

「え」

声は目の前の少女からではなく背後から響き、振り返ると、剣呑な表情を浮かべた青年が、部屋の入口で、その扉に寄り掛かり、こちらを睨んでいた。

「誰？」

「あら、ヴィッツ。戻ってきたの？ おかえりなさい」

「アイシス、君はまた…」

どうして僕の不在の時に勝手に部屋に上がっているんだ。しかも、誰だ。そいつは。……不快だ」

「だって、仕方ないでしょう？」

「あなたがいる時には掃除ができないもの」

「掃除？」

「君が“掃除だ”と言って、僕の部屋の秩序を乱すから、

毎回、毎回、僕は物探しに時間を取られるんだ。

余計なことはいしないでくれ。

……いいか、アイシス。

君の目にこの部屋がどう映っているのか知らないが、

この部屋は散らかっているわけではないんだ。

僕流の置き方で、ちゃんと整理されて置かれているんだ。

そう。置かれている。

落ちているのではなく、置いてあるんだ。そのメモも、その瓶も

「！

「どう見てもゴミよ？ でしょう？ これゴミよね？

それに、空き瓶はちゃんと洗って棚にしまった方が次に使う時に便利よ？」

「君は分かっているじゃない！」

大声を出すと、ヴィッツは少女との議論を打ち切った。

大股に部屋に入ってくると、どかりと研究机の前に座った。

試験管を手にとると、それをクルクルと手の中で回す。

アイシスと呼ばれた少女は、肩を竦めて、俺に振り返った。

「彼がこの部屋の主、ヴィッツ・エルヴィンよ。

私はアイシス・クルーガー。

あなたはベルタっていうのね？ よろしく、ベルタ」

アイシスはにつこりと微笑んだ。

俺はその笑みを複雑な思いで凝視する。

なぜなら、アイシスが俺の知る“アイシス”であるならば、それは彼女が俺の祖母だということだからだ。

思わず、

“ばあちゃん！！！”と叫びたくなってしまった。

しかし、そう叫ぶには、彼女は若すぎるし、トキホタルの光液で時間を渡ってきたと言っても、信じてくれるかどうか…。

そして…。

俺はヴィッツに視線を向けた。

彼は弄んでいた試験管を置いて、次は分厚い魔法書を開いていた。その、他人を完全に無視する背中を見つめて、俺は息を呑む。

ヴィッツ・エルヴィン。

彼がヴィッツ・エルヴィン。

本当に、あの“ヴィッツ・エルヴィン”であるのなら、彼は、俺の祖父だ…。

10・あんたが付けた名前だ。あんたが！！！！

「ベルタ？」

机に向かつて魔法書を読んでいたはずの人物が、
眉を寄せて、こちらを振り返った。

「まるで女の名前だな」

俺は思わず言い返しそうになった。

（あんたが付けた名前だ。あんたが！！！！）

もちろん、そんなこと言えるはずがなかったから、
じっと堪えて黙っていると、傍らの少女が代わりに言い返してくれ
た。

「あら、いいじゃない。綺麗な名前よ」

「なるほど。名前通り、女々しそうな顔をしている」

「グイッツ！」

何ということをするのだ、と、
アイシスは俺を気にしながら、窘める声を上げた。

「名前はその人が両親から貰った最初のプレゼントよ！
それを笑うなんて、その人自身を侮辱するのと一緒によ！」

「うるさい。僕は何も笑ったわけでも、侮辱したわけでもない。
珍しい名前だな、と言って、
そいつによく似合った名前だと、感心してみせたのさ」

「そういう風には聞こえなかったわ」

「それは君の理解力が乏しいからさ。
いいか、アイシス。

“ベルタ”には“美しい”とか“美しい人”という意味がある。
だから普通、娘に名付ける名前なんだ。
だが、それを敢えて息子に付けたのだとしたら、
それはきつと容姿ではなく、心が美しく育つようにと、

そう願って名付けたものに違いない。……いい名前じゃないか。
もし僕に息子ができたら、ベルタと名付けることにしよう」

「あら、珍しいわ。ヴィッツが人を誉めるなんて。
けれど、とりあえず先に貶す辺りが、ヴィッツよね」

困った人だわ、とアイシスは俺を振り返った。

「ごめんなさいね。気を悪くしないで。
ヴィッツに悪気はさらさらないの。」

だけど、ああも口が悪い上に、天邪鬼で、
彼の中では一本の筋が通っているのだけど、
他の人からしてみれば、コロコロ意見が変わるように見えるもの
で、

みんなに嫌われているのよ」

困った、困った、と言い、アイシスは続けた。

「人付き合いが苦手とか言う以前の問題なのよ。
他人をまるつきり無視して生きているのよね、ヴィッツは。
自分の部屋と図書館の往復ばかりの毎日で、
ひたすらずっと本ばかり読んでいるのよ。」

だから、“本の虫”を軽く越えて“変人”って言われているわ。
何がそんなに楽しいのかしらね。夢中で読んじやって」

「聞こえているぞ、アイシス。

僕の陰口なら、まず僕の部屋から出て行ってからすることだ。
少なくとも、僕がいなくてところで、どうぞ」

「あら、分からない？

あなたに聞こえるように、わざと言っているのよ」

アイシスが言い返すと、ヴィッツは不機嫌な顔をして、
再び魔法書に視線を落とした。

「ね？　すぐに人を無視するでしょ？」

「そうだな。……でも。

彼がそういう人でも、それで彼がみんなに嫌われていようと、
それでも、君は彼が好きなんだろ？」

「……っ」

翡翠の瞳が大きく見開かれた後、
彼女の白い頬が、パツと赤く染まった。

「みんなには趣味が悪いって言われるの。
顔は綺麗だけど、中身がああだから。
それにちつとも構ってくれないの。
デートなんてとんでもないわ。
一緒に出かけたこともないの。
……でも、可愛いところもあるのよ」

アイシスはにっこりと微笑んだ。

彼女の「可愛いところも」という言葉には、
賛同しがたいけれど、
おそらく祖父をずっと支えてきたのは彼女なのだろう、と思った。

誰か1人でも理解者のいる者は強い。
どこにでも行けるし、何だってできるからだ。

それは、必ず元の場所に戻ってこられる力を、
自分の理解者である存在が与えてくれるからだ。

アイシスは…、
祖母は、俺が5歳の時に病死した。

祖父にはこんなにも強い支えがあつたのだとしたら、
それを失って、暗い森に独り籠もるようになったわけも分かる気が

した。

俺は黙々と読書し続けるヴィッツの背中を見やった。

「彼は何を研究しているんだ？」

「何かしら？」

強力な魔法を探しているみたいだけど……」

「強力な魔法？」

「ええ。ここの授業では教えてくれないような、そんな威力が強い魔法を探しているみたい。だから、古代魔法書ばかり読んでいるわ」

そう言えば、と、

アイシスは自分の唇に人差し指を押し当てた。

「ヴェルナーから借りた魔法書はどうしたのかしら？」

先日まで片時も手放さなかったのに、いつの間にか持っていないし、部屋のどこにもないのよね。ヴェルナーに返したのかしら……？」

「ヴェルナー？」

「ヴェルナーは眠り森の領主よ。」

ヴェルナー・L・クロイツェン。

私以外でヴィッツに話しかけてくれる稀な人ね。
貴重な存在だわ」

「へえ」

「ヴェルナーは貴族だから、
ヴィッツの研究に援助もしてくれているの」

「援助？」

「そう。いろいろとね…。」

先日の魔法書も、そう。

埃の被った本でね、薄っぺらい本だったけれど、
すごく貴重な物だって言っていたわ。

だから、ヴィッツがちゃんとヴェルナーに返したかどうか、心配で…。」

「その本なら返した」

素っ気ない声が響いた。

「あら、そつなの？」

アイシスがヴィッツを振り返る。

「そうとう危険な方法で手に入れた本らしかったからね。早めに返してやったんだ。」

内容はすべて頭の中に入れ終えたことだし……」

「と言うことは、

その本は役に立ったってことかしら？」

「大いに。ヴェルナーにしては上出来だった。」

彼が今回ほど僕の役に立ったことは無いね」

「ちゃんとお礼を言ったのかしら？」

「礼？ なぜ？」

彼は僕の役に立ってこそ当然なんだ。

それなのに、いちいち礼なんて言ってられるわけがない」

「ヴィッツ……」

呆れ声が響いた。

だが、そんなことお構いなし、

ヴィッツは、さあ、と言って席を立った。

「これで良いはずだ。広範囲効果の魔法を、単体対象の魔法になるように呪文を変えてみたし、威力も僕の魔力に合わせたものにしたし、きつとうまく行くはずだ」

喜々として瞳を輝かせているヴィッツを、俺はアイシスと共に、啞然として見上げた。

11・好みの問題か、これは…？

魔法式が分かったー、

と叫んだ後のヴィッツの行動は早かった。

俺はもちろん、アイシスさえも放り出して部屋から飛び出していく。

そのため、

アイシスと俺は必死に彼の後を追いかける必要がなかった。

「なんなんだ、いったい!？」

「新しい魔法を使ってみたくて仕方ないのね。可愛い!」

「え!？ どこが可愛い!？」

「あら、だって、子どもみたいじゃないの!」

「どこが!？」

廊下を走りながら、アイシスと俺は大声を出し合う。

それで俺はこの時、ばあちゃんの好みを激しく疑ったわけで…。

いや！ でも！

ばあちゃんの好みがこうだったから、俺の父親が生まれたわけで、俺も存在しているわけだから、……いいのか???

なんて、ぐるぐる考えている間に、ヴィッツの背に追い付いた。ヴィッツの足が止まったのだ。

「ドレイク！

今日こそ決着を付けようじゃないかっ！」

喜々として指差す相手は、小麦色の肌をした少年だった。

ダークエルフだ、と一目で分かる特徴。

黒髪の下から覗く瞳は、湖のように蒼い。

年齢は、ヴィッツよりいくつか年下に見える。

「彼は？」

ヴィッツが今にも戦闘態勢に入りそうだったので、アイシスと俺は少し距離を取った。

ここは、ティファレット寮の真ん前。
エントランスから、何事かと覗く寮生の顔が見える。

「彼はドレイクよ。嘆き谷の領主の息子なの」

「嘆き谷!?!」

「あら、知っているの？」

エルフなのにアルカウムの地理に明るいのね」

「偶々聞いたことがあっただけさ」

偶々…。

嘆き谷は、祖父ヴィッツが魔法を放ち、
その地で暮らす者たちすべてを一瞬で消し去ったという場所である。

嘆き谷の領主の息子だというドレイク。

……これは偶然なのだろうか。

「ヴィッツはドレイクに何をしようって言ったんだ？」

「いつものことよ。遊んで欲しいの」

「遊ぶ？」

しかし、ヴィッツとドレイクの間には流れる空気は不穏である。

2人は互いを睨み合い、黙して間合いを計っているように見える。

「ヴィッツってば、ドレイクのことを大好きなの。

好きで、好きで、好きで、堪らなく好きなのよ。

でも、その想いをどうしたらいいのか分からないみたいね。

だから、ああして、勝負を申し込んでいるの。

ほぼ毎日のように、ああしているのよ。

時々是不意打ちすることもあるのだけど。

ドレイクの姿を見かけたら、どうしてもイグニを放ちたくなるんですって。

ジーラでも構わないのだけど、何かしなければうずうずしてしまうのね。

自分の方に振り向いて欲しくて堪らないのよ。

不器用で、天邪鬼なの。…ね！ね！可愛いでしょ！」

「いや、ちつとも…」

不意打ちでイグニとか…、

下手したら大怪我するんですけど。

そうこうしている間に、ヴィッツの手のひらから火花が散った。

彼は何かを口の中で呟き、指先で魔法式を描いた。

一方、ドレイクの方も魔法式を描く。
あれはおそらくブロンドの魔法式だ。

ヴィッツは左右で別々の魔法陣を描きながら、
やがて左手をかざし、
ドレイクが放ったブロンドを左手から生み出した魔法で打ち払った。
右手は淡い輝きを保つ。

それを見たドレイクは、イグニマの魔法式を描き始めた。

「この決着って、いつもどうやって着くんだ？」

「ヴィッツが負けるの」

「え？ 負けんの？！」

「そうよ。そして、とっても悔しがるの。」

次こそは倒してやるって捨て台詞を吐いて去るのよ。
そして、翌日には再戦を申し込んで……その繰り返し」

「ドレイクはそんなに強いのか？」

「強いわ。……でも、ヴィッツは天才よ」

言って、

アイシスは振り返り、にっこりと微笑んだ、

「言ったでしょ？ ヴイツツはただ構って欲しいだけなの。
勝ってしまったら、次に勝負する理由がなくなってしまうじゃない。
い。」

構って貰えなくなってしまうと思っているの」

「普通に友達になればいいだろ？」

「その“普通”ができないのがヴィツツなのよ」

バチン、と何かが弾き飛んだ。

それはヴィツツの右手から放たれた魔法で、
その音から、それが不発だったことが知れる。

「……」

ヴィツツが石像のように固まったのは、ごくごく僅かの間。
くるりと踵を返すと、彼は駆けだした。

「覚えてろよ！ 次こそは、ぶつ殺してやる！！！」

叫び声と共に遠ざかっていく背中を、

俺は再び、アイシスと共に追いかけるハメになった。

ふと、ヴィッツが置き去りにしたドレイクを振り返った。
すると、多くの友人達に囲まれた少年の姿が見えた。

それは、自室に駆け込み、
大きな音を立ててたその扉を閉めたヴィッツとは、
対照的な光景のように思えた。

「ヴィッツ、入るわね」

返事など、どうせ戻って来やしないのだと、
アイシスはノックもせず扉を開き、ヴィッツに歩み寄った。

「僕の計算はあっていたはずだ！」

入るなり聞こえてきた声に、俺はビビリ、
アイシスは苦笑を漏らした。

「今日こそは勝てるはずだったんだ！

魔法式は完璧だった。マテリアルもあっていたはずだし、
この僕が呪文を間違えるなんてありえない。

なのに、なぜ…。ああ、なぜ勝てないんだ。あのダークエルフに。
僕はもうダメかもしれない。あんなダークエルフに負けるなんて。
いったい何年ここで学んでいると思っっているんだ。

それなのに、僕はまだまだ未熟だ。

ああ、未熟すぎて、自分が心から腹立たしい。

嫌気すら覚えるね。居たたまれない。そう、居たたまれない。
消えて無くなってしまえばいいんだ、僕なんて…」

頭を抱えて床に倒れ伏すヴィッツを、
俺は啞然として見下ろした。

「ええつと…」

ほらね、とアイシスが目配せをした。

「とても悔しがっているでしょう?」

「でも、わざと負けたんじゃないのか?」

「まさか。わざとなんて負けないわよ。本気よ。
ヴィッツはいつでも本気なのよ」

「でも、さっき…」

「あれは無意識。」

もしくは、本気だからこそ勝てないの…」

分かるようで、分らないと、俺は眉間に皺を寄せた。

すると、アイシスは、見ていて、と小声で言っ

て、床に膝を着くと、

ふわりとヴィッツに覆い被さり、その体を両腕で抱き締めた。

「大丈夫よ、ヴィッツ。貴方は天才ですもの。」

次に勝つために今日は相手に勝ちを譲ってあげただけなの。

それに、今日負けたおかげで、貴方の探求心は損なわれなかった。
明日勝つために貴方は研究を続けるのでしょうか?」

「負け続ける僕には存在価値がない」

「そんなことはないわ。」

私には貴方が必要ですもの」

「……………アイシス。その本を取ってくれ」

「分かったわ」

にっこりとして、アイシスは体を起こし、
ヴィッツの机から魔法書を一冊手に取ると、
床に伏したままのヴィッツに差し出した。

すると、ヴィッツはそれを広げると、
ごろんと寝返りを打って、そのまま読書を始めてしまった。

アイシスが振り返る。

「これでいつも通りよ」

「え…。ええ???」

「復活したから大丈夫ってこと。
話しかけてみるといいわ。
返ってくるのは皮肉ばかりだから」

彼女はくすくすと笑った。

「ね？　可愛いでしょう？」

12・それは貴重だと、彼は言う。

危ないと思った。

ばあちゃんの明るさに惹かれつつあるのも、

じいちゃんが、俺の知っている“クソジジイ”とあまりにも掛け離れていて、

うっかり“面白い”と思ってしまうのも、

ここに来た本来の目的を忘れてしまいそうで、危うい。

何のためにジルベルトから時を渡る幻薬を貰ったのか、もう一度、思い直してみなければならなかった。

まず第一に、祖父を知ること。

俺は祖父のことを知らなすぎるから。

恐れ、従うだけの対象である限りは、

彼の心を理解することはできないだろう。

そして、次に、

祖父に禁忌魔法を使うよう命じた者がいるはずだから、

その人物を調べることに。

なぜ、祖父はその人物に従うのかも、できれば知りたいと思う。

そして、最後に。

もし可能であれば、魔法を使おうとする祖父を止めること。

それができるのであれば、

何もかもがハッピーエンドになることは疑いようがないのだけど…。

俺は魔法書に没頭するヴィッツに視線を向けてから、
アイシスを見やった。

「ヴィッツはドレイクに勝ちたくて研究をしているのか？」

「そうね。それもあるのだと思うわ。

ただの探求心ってこともあるでしょうけれど。

やっぱり新しい魔法を使えるようになったら、試してみたくなる
ものですもの。

ドレイクに試して成功したら、

ヴィッツにとっての“成功”なのかもしれないわね」

「ヴィッツはドレイクのことが……その…。好きなんだよな?。」

「ええ。大好きよ」

躊躇しながら口にした俺の言葉を、

アイシスは何でもないことのようにあっさりと肯定した。

「きっかけは何だったかしら。他愛も無いことだった気がするわ。ヴィッツが新しい幻薬を作っていた時に、その魔法式で悩んでいて、そこに通り掛かったドレイクが、何か一言言ってみた。……詳しいことは知らないんだけどね。でも、その一言がヴィッツにとって、目から鱗が落ちる一言だったらしくて、それからなのよ。ヴィッツがドレイクに執着するようになったのは」

「へえ」

「自分にはない考えを持っている人は貴重だとか、自分とは異なる考え方ができる人は大切だとか何とか…。常に“はい、そうですね”って言われるよりも、“それ違うんじゃない？”って言われることの方が、ヴィッツは大事だって考えているみたい」

「それは…分かる気がする」

「そう？」

アイシスはにっこりと微笑んだ。

「そういうわけで、ヴィッツにとってドレイクは特別な存在だったことに間違いはないわ。もっと彼と話したい、彼の言葉が聞きたいと思っているのじゃないけれど、」

天邪鬼なヴィッツにはそれを言うことができなくて、
代わりに口にしてしまうのは“次こそは殺してやる！”なのだから、

本当にどうしようもないわよね」

「アイシス、うるさい」

本から視線を上げ、ヴィッツがアイシスを睨み付けた。

「君はなんてうるさい女なんだ。

そして、なぜ僕の邪魔ばかりをするんだ？

だいたい君はいつもいっつもどうしてそんなに話す言葉があるんだ。
まるでしゃべるために生まれてきたようだな。

何が楽しくてそうぺらぺらと、

あることないこと勝手にしゃべっているんだ。

君が口を閉ざしさえすれば、僕の研究はもつとはかどるはずなんだ。

そう。君が僕の部屋を掃除しようだなんて思わなければ、

今ごろ僕はドレイクをぶち殺し、勝利の酒を味わっていたはずだ。

それから君は、昨日、僕にいったい何を食わせたんだ？

夕食だと言って僕の口に無理矢理突っ込んだアレの味が、

未だに舌の上に残っているようで、僕の集中力はガタ落ちだ。

そうでなければ、こんなにも君の存在が気になるということはなかったはずだ。

あー。そうか。そいつもいたな。ベルタとかいう…。

僕の部屋に僕以外の者がいることに堪えられない。

どうでもいいから、早くどこかに行ってくれないか？
僕の部屋から出て行ってくれ」

啞然とした。

それでいったい俺はどうしたらいいのかと、アイシスを振り返った。
部屋を出て行けと言われたからには出て行かなければならないのだろうか。

だけど、俺はヴィッツから離れるわけにはいかない。

それこそ何のためにここに来たのか分からなくなってしまうからだ。

せめて彼女がヴィッツの言葉を退けて、

部屋に残ってくれたのなら、俺も居つづけることができるのだが…。
そんな俺の思いなど知らないアイシスは、
すくつと立ち上がり、ヴィッツに向かって肩を竦めた。

「わかったわ。うるさい女は退散します。

だから、どうぞ研究に没頭してくださいね！」

ふん、と鼻を鳴らすと、あっさり部屋を出て行ってしまった。

俺も出ていくべきだろうか。

だけど、ここで出てしまったら、
もう二度とヴィッツの部屋には入れないような気がして、足が動かない。

結局、俺はその場に立ち尽くしてしまった。

しばらくあって、ヴィッツが本を旁らに置き、
体を起こすと、俺の方に鋭い視線を向けてきた。

「……………それで？」

「え？」

「君は何者なんだ？」

「……………」

そのためにアイシスを追い払ったのではないかと思わせるような沈黙。

俺は口が利けなくなり、ただヴィッツの緑色の瞳を見つめた。

13・ただ彼に自分を知って貰いたかっただけ

思えば、

その時初めて俺は彼の瞳に映ったように思う。

彼は俺を正面から見つめ、

俺も彼を真っ直ぐに見つめた。

「俺は…」

半分白状していたと思う。

だが、全部を白状できなかったのは、
彼の瞳が大きく見開かれたからだ。

「あ！そうか。わかったぞ！！」

「えええっ！？」

「なんだ、そうだったのか。」

こんな簡単なことに気付かないなんて、僕はどうかしている！」

ヴィッツは、ぱつと身を翻すと、机に向かい、ものすごい勢いでメモを取り始めた。彼の周りに書き殴られた紙切れが散っていく。

「なんだ。簡単なことじゃないか。

分かってみると、じつにくだらない。

僕はなんてくだらないことで悩んでいたんだろう」

魔法式を書き殴った紙を、ヴィッツはぐしゃりと握り、爛々と瞳を輝かせながら立ち上がった。

「今度こそドレイクをぶち殺してやれる！」

それは先程のリプレイだった。

もはや俺のことなど眼中に無く、

彼は何もかもを放り捨てると、部屋から飛び出していった。

そうすると、

俺も彼に合わせて先程と同じことを繰り返すしかない。

つまり、ヴィッツを追ったのだ。

彼は自分の部屋を出ると、ドレイクの部屋の扉を叩き、留守だと知ると、1階のサロン、それから、食堂に向かった。

それでもドレイクの姿を見つけれないと寮の外へと飛び出した。

行き着いた場所は寮の裏の森。

広大な森の中、まるでヴィッツにはドレイクを探し出すことのできる術があるかのように、彼は木々の間を駆け抜けた。

「ドレイク！」

その姿を見つけるや否や、ヴィッツはブロンを放った。

ダークエルフ特有の小麦粉色の肌をした少年が、驚いたように振り返り、湖色の瞳を一瞬大きく見開かせると、地面を転がるようにしてヴィッツが放ったブロンを避けた。

闇で染めたようなドレイクの髪が、
ジリリと僅かに焦げて、嫌な臭いをさせる。

ヴィッツは軽く舌打ちをした。

「今日こそはぶっ殺してやる！」

僕の新しい魔法を受けてみるといいよ」

ヴィッツの人差し指が空で魔法式を描く。
と同時に、彼は呪文を唱え始めている。

ざわりと、胸が騒いだ。

体の奥が疼く。

悪い予感がした。

その魔法は使ってはならないと、頭の中で警報が激しく鳴っている。

「やめろっ！ジジイ！！！」

絶叫。

だが、それは爆音に重なり、そしてかき消された。

カッ、と視界が白い光に覆われた。

眩しさに目を閉じると、瞼の裏側にまで光が射し、真っ赤になって見えた。

一度閉ざした瞳はそのまましばらく開けなかった。

沈黙。

やがて雑音が帰ってきて、俺はようやく瞼を開いた。

信じがたい光景だった。

円形にハゲた草地のその中央に黒い影が焼き付いている。

それは人影であるのは間違いようがないのだが、影の主の姿がないのだ。

「ドレイク？」

弱々しい声が響いた。

ヴィッツはその影が焼き付いた地面に駆け寄ると、膝を折って、崩れるように地面に伏した。

「ドレイク！ドレイク！こんなの嘘だ！

きつとどこかに隠れて僕を驚かせるつもりなんだな。そうでなければ嫌だ。なんて！どうして！

こんなことがあっていいはずがない！」

こんなつもりではなかった。

そう嘆きながら地面に拳を叩きつけるヴィッツ。

その姿を見つめながら、俺は理解した。

ヴィッツの魔法が成功してしまったのだということを。

凄まじい光熱を浴びたドレイクは、その影を地面に焼き付けて、灰となった。

ヴィッツがその才能を認め、羨み、妬み、そして愛した彼はもはやどこにもいないのだ。

殺してやると口癖のように言ってきた。

けれど、一度たりとも本気で死んでほしいと願ったことはない。

ただ彼に勝ちただけ。

いや、勝つことが目的ではなかった。

ただ彼に自分を知って貰いたかっただけなのだ。

自分が彼を認めているように、彼にも自分のことを認めて貰いたかった。

同じだけ。

同じ気持ちを返して貰いたかった。

ただそれだけのこと。

だけど、それが何よりも困難なことで、自分には相手を傷つける術しか持たない。

だからこうするしか自分にはなくて、
何度やり直しても同じことを繰り返すだろう。

彼が好きで、

彼に近付きたくて堪らない気持ちを抑えることができないから。

だけど。

ヴィッツは嘆き叫んだ。咽が裂けるほどに。

こんなはずではなかった！

14・禁則魔法

「エルヴィン？」

ヴィッツを呼ぶ声に、ハツとして俺は振り返った。

青年だ。

身なりの良いエルフで、こちらに歩いて来るその流れるような仕草から彼が貴族であることが窺えた。

「素晴らしい！」

青年は辺りを見渡して、ヴィッツに歓喜の声を浴びせた。

「エルヴィン、君は素晴らしい！わたしの見込み通りだ。
あの魔法書を苦労して手に入れた甲斐があった。
君は見事あの魔法を使いこなせたというわけだな」

「……ヴェルナー……」

ヴィッツは怠慢な動作で青年に振り返り、彼の名前を呼んだ。
ヴェルナー・L・クロイツェン。
眠り森の若き領主だ。

「実に見事だ、ヴィッツ・エルヴィン！

あの魔法は1000年前に捨てられた魔法だったんだ。
こんなにも圧倒的で、こんなにも偉大な魔法であるにも関わらず、
だ。

何千、いや、何万という生命を一瞬で奪える魔法は、
この魔法の他にないだろう」

「黙れ、ヴェルナー！

ドレイクがつ。ドレイクが……死んだ……っ」

「それがどうした？」

「なんだと……？」

「ヴィッツ、君は知っているはずだ。
今の魔法に対となる魔法があることを」

「……………」

ぞくりと背筋が寒くなった。

それは甦りの魔法。

1000年前のエルフとダークエルフの戦いで使われたとされている魔法のことだ。

戦争の終焉。

その直前で使われた魔法は、
殺したダークエルフの屍をオークに変え、操るというものだった。

アルヘイムの魔法使いに操られたオークは、
元は自分の親、兄弟、子であり、仲間、
同朋であったダークエルフたちを次々に襲い、殺していった。

これには、ダークエルフたちも涙が枯れるほどに絶望したが、
心あるエルフたちも非難の声を上げた。
そして、戦争は終わったのだ。同盟という名の下に。

死者を蘇らせる魔法は、
ソレンティアの最初の授業で読まされる『基礎魔法大全』に載っている通り、禁則魔法である。
固く使用を禁じられている。

だが……。

ヴィッツは、ドレイクが地面に焼き付けた影を見下ろし、
じっと考え込んでいる。

(ダメだ、ジジイ!!!!)

今度こそ止めないとおつ。

彼は人を殺した。

もはやそれだけで後戻りのできない場所に来ている。けど、死者を蘇らせてしまえば、さらにもっと…。

二度と、戻ってこられない。

彼を。

自分を。

彼がこれから殺すであろう人々を。

……………救えない。

俺はヴィッツの肩を力一杯に掴んだ。

「やめろっ。それだけはダメだ!」

「ドレイクが死んだんだ! 僕が殺した!」

「それでもっ。…………それでも死者を蘇らせてはいけない」

「いけない？ 禁忌だと言いたいのだろ？
そんなこと分かっている！

分かっただけで言っているんだ！！

分かっている…それでも。それでも、僕は彼の顔を、もう一度見た
いんだ。

彼の声を、もう一度……っ」

止めることなんて、無理だ。

最初から不可能なことだったのだ。

何度同じことをやり直しても、

彼は同じように繰り返しただろう。

グイツは魔法式を描き出した。

「ドレイクをオーク《魔物》なんかにはさせない。

僕は天才だ。魔法式の書き換えなんて簡単だ。

彼を、元通りの彼のまま生き返らせてみせる」

自分は天才なのだ、と繰り返す彼の声は震えていた。
魔法式を描く指先も、腕でも、肘も、肩も、
まるで真冬の野外に薄着で放り出されたかのように、
ガタガタと震えている。

俺はそれを見ていることしかできなかった。

やがて、魔法式を描き終え、呪文を唱え終えたヴィッツが、両手を地面に着いて、焼き付いた影に向かって叫んだ。

「帰ってこい！ドレイク！！！」

15・甦り

禍々しいとか、不吉な感じはしなかった。

そうかと言え、

神聖な感じも、喜ばしい感じもしない。

ただ、空虚で。

心に、

ぽっかりと穴があいたかのように、虚しい。

黒。

いや、白。

色の無い力が下の方から、
ずっと下の方から迫り上がってきて、

強く強く何かを押し上げてくる。

畏れを抱いたのは、それが禁忌だからだろうか。

ごくりと、ヴィッツの咽が鳴る音を、俺は聞いた。

畏れを抱く俺に対して、彼は期待を抱いているようだった。

地面に黒く焼き付いた影が盛り上がり、
やがてそこから手が生えてきた。

いや、違う。

生えてきたのではない。

それはまるで生き埋めにされた人が土から這い出てくるかのようだった。

「ドレイク…？」

蘇った彼に、ヴィッツは恐る恐る声をかけた。

彼は瞳を瞬かせる。

そして、小さく唇を動かした。

「……ヴィッツ…」

彼は戸惑う瞳でヴィッツを見つめた。

その様子は、自分が死んだことも、
生き返ったことも理解できていない雰囲気だ。

「ヴィッツ…。お前、俺に何をしたんだ？」

ドレイクの問いに、ヴィッツは頭を振った。

「いいんだ、君は。いい。」

君は何も心配しなくていいから…」

「ヴィッツ？」

大きく頭を振ったヴィッツの襟元がはだけて、
その首もとに黒く醜い痣が浮かび上がっていくのが見えた。
同じ痣だ。

そう思い、俺は自分の右肩を掴んだ。
だが、それは“同じ”ではなかった。

ヴィッツの痣を指差してヴェルナーが告げる。

「それは印だ。禁則魔法を使った者の罪の印」

「禁則魔法だと？」

ヴィッツ、お前、なぜそんな魔法を……」

信じがたいものを見るかのように、
ドレイクがヴィッツを見つめる。

「先生たちに相談をしよう。その印を消せるかもしれない」

「待て、ドレイク。」

教師に告げれば、ヴィッツはソレンティアを追われるだろう。
彼はそれだけのことをしでかした。

ソレンティアを卒業しなければ、故郷で魔法を使えない。
ヴィッツがこれまでここで学んできたことはすべて無と化す」

「だから、なんだ？」

「このことは、君とヴィッツとわたしの秘密にしようじゃないか。」

……これはヴィッツのためだ。

君はヴィッツのおかげで蘇った。そうだろう?」

「……蘇った?」

「そう。君はヴィッツに殺され、
ヴィッツによって生き返ったんだよ」

「……ヴィッツ……。なんてことを……」

ヴィッツは己の手を見下ろしていた。

今更ながら自分がしでかしたことが分かってきた様子だった。

ソレンティアを追われたら、もう二度と魔法は使えない。

それがヴィッツにとってどれほど重たいことなのか、

俺には計り知れなかったけれど、

彼は12の時にソレンティアに入学して、

それから10年以上もここで学び続けてきたのだという。

天才だと言われ、

そう言われるだけの魔力と知識を持っている。

ソレンティアを追われたら、それらをすべて失うのだ。

4つの世界に存在する魔法使いはすべてソレンティアの卒業生である。

ソレンティアを卒業すると、
ルティアマスター
資格修士の称号が得られ、

またこれは一人前の魔法使いになった事の証明書であるため、
資格修士の称号を取得することなくソレンティアを出た場合、
もとの世界に戻った後、魔法を使うことができなくなるのだ。

どういう仕組みなのかは知らないが、
卒業せずにもとの世界に戻った者は、
何らかの力が働いて魔力を失ってしまうらしい。

今まで積み重ねて来たものを壊せるか？

一度、手にした力を手放せるか？

積み重ねてきた年月が長ければ長いほど、
壊すのは容易ではないだろうし、
手にした力が強大であればあるほど、
手放すのは、我が身を引き千切るほど、辛くなるだろう。

ヴィッツはドレイクに向かって、深く深く頭を下げた。

「お願いだ、ドレイク。

このことは誰にも言わないでくれ。
秘密にして貰いたい……」

何も壊せず。

何も手放すことは、できなかった。

16・力は兇悪で、恐ろしい。

完璧な人なんていない。

いつも正しくて。

間違ったことは言わないし、
間違った行いもない。

そんな人はいないのだと、その時、俺は思い知った。

目の前で、若き祖父が、
ドレイクに向かって膝を折り、頭を下げ、
今にも泣きそうな震える声で懇願している。

人は、弱い。

力は兇悪で、恐ろしい。

止められなかった。

それでは、
なんのために俺は時を越えてここにいるのだろう。

「聞いたかい、ドレイク？
それで、どうする？ このことを誰かに告げるかい？」

「……………」

言えるわけがない。
ウィッツの縋るような瞳を見つめながら、ドレイクは頭を左右に振る。

「俺は…なんだか、魔法が怖くなった…」

「ドレイク？」

「……嘆き谷に帰りたい……」

「帰りたい？ まさか……」

「明日、学生課に退学届けを出す」

「ドレイク！」

そんなことをしたら、二度と魔法を使えなくなってしまう、とヴィッツの表情が訴えている。

しかし、ドレイクはすでに決意を固めてしまったかのようにだった。

「俺はお前とは違う。」

だから、俺には魔法なんて必要ないんだ」

「必要ない……？」

「安心しろ、ヴィッツ。今日のことは誰にも話さない。」

それに、アルカウムに戻ったら、会うこともないだろう」

「もう……会えない……？」

自分は一度死んだのだ。

そして、ヴィッツの禁則魔法によって生き返ったのだ。

そんな事実、

ドレイクは一刻も早く忘れ去りたかったのだらう。

ソレンティアにいれば、ヴィッツと顔を合わせることになる。

彼の顔を見れば、思い出してしまう。

ヴィッツが禁則魔法を使ったことも、

自分がそれにより蘇ったことも。

耐えられない。

短い別れを告げて、ドレイクはヴィッツのもとを去っていく。

その後ろ姿を、無力なヴィッツはただ見送った。

さてと、と動き出した人物がいた。
ヴェルナー・L・クロイツェンだ。

彼はヴィッツに歩み寄ると、
膝を着いて、地面に両手を着いて頂垂れているヴィッツの顔を覗き
込んだ。

そして、その耳に吹き込むように囁いた。

「君はわたしの口を塞ぐために、何をしてくれるだろうか？」

「……………」

「わたしは君のために、
かなり危険な手段を使って魔法書を手に入れてあげたね。
それは君にわたしたちの願いを聞いて貰いたいからだよ」

「願い？ わたしたち？」

青ざめた顔を上げて、ヴィッツはヴェルナーを凝視した。

「ダークエルフは醜い。

野蛮で、礼儀を知らず、我々エルフに比べ知能の低い」

「……………」

「そんな種族が妖精界の半分近くの大地にのさばっているなど、
許せることではない。そうだろう？」

「……何を…言っている？」

「分からないか？」

あの黒いヤツらを根絶やしにしたいって言っているのさ。
君にはその力がある。わたしたちには君のその力が必要だ」

「アルカウムとの戦争を望む組織があると聞いたことがある。
ヴェルナー、貴様もその一味か！」

「ひどい言い様だな。まるで悪の組織みたいではないか。
わたしたちは正義の名の下に戦いを望んでいるのだ」

「何が正義だ」

「ヴィッツ、君に拒否権がないことを忘れてはいけないう。
わたしの一言が、君から魔力を奪うことになるのだから」

「……っ」

「わたしたちの力となってくれるね？」

17・先に謝っておく。すまない。

抜け殻のようなヴィッツの背を、
俺は黙って見下ろしていた。

ドレイクが去り、
ヴェルナー・L・クロイツェンも去った。

ドレイクはヴィッツとの縁を断ち切って去ったが、
ヴェルナーは、ヴィッツに無数の鎖を巻き付け、
心も体も、身動きが取れないようにしてから去っていった。

鎖を断ち切る術がまるで無いわけではなかった。
ヴィッツが魔法を捨てればいいのだ。

そうすれば、彼が数十年後に、
嘆き谷のダークエルフたちを皆殺しにすることはなくなるだろうし。
禁忌を犯した罪は消えないが、
殺した魂から受ける呪詛を体に刻み、
孫にまでそれを受け継がせることはなくなるだろう。

だけど、ヴィッツにはできない。

魔法は捨てられない。

「僕には、人として優秀な兄がいるんだ」

ぽつりと、ヴィッツが言った。

俺を見つめ、手招くと、

まるで独り言のようなそれを続けた。

「兄はいつでも笑っていて、誰からも好かれてるんだ。
とにかく明るくてね。」

彼としゃべると、みんなが笑顔になるんだ。

僕の方が彼より成績は優秀のはずんだけどね、

みんな、彼を頼りにする。

彼には……勝てない……」

「だから、魔法に拘るのか？」

「ここでは“天才”でいられるからな」

ヴィッツは苦笑を浮かべた。

「両親を喜ばせるような会話をしなくてもいい。
気の利いた冗談を言うために、頭を悩ませる必要もないし、
可笑しくも楽しくもないのにケタケタと笑う必要もない。
魔法を使える僕は、魔法さえ使えばそれでいいから。
それだけで、存在を認めて貰えるから……」

言おうか、言うまいか、
迷った末に、俺は口を開いた。

「あんたは、数十年後に嘆き谷のダークエルフを皆殺しにする」

「……なに……？」

「そして、殺したダークエルフたちをオーク（魔物）にして操り、
他のダークエルフの村を襲わせるんだ」

「……………」

「呪詛を得る。……………これだ」

俺は服をめくって、ヴィッツに体を見せた。
ヴィッツは瞳を細めて黒く醜い痣を見つめる。

「アルカウムの古語だな……」

怪訝な顔。

それから、納得したように頷いた。

「この呪詛は宿主が死ぬと、実体化し、兇悪なオークとなると、ここに書いてある」

ヴィッツの指が、俺の皮膚の上を滑る。

「それを防ぐためには、死ぬ前に他者に渡す必要がある、と。
………君は僕の何だ？」

「孫だよ、ジジイ」

「なるほど……」

ヴィッツは僅かに考えると、ゆっくりと頭を下げた。

「先に謝っておく。すまない」

「なんだそれ…。」

つか、知ってたけど、頑固だよな？」

やはり彼には魔法を手放す気がないのだ。

彼を止めようとして、

過去にまで来たが、それは叶わなかった。

だけど、無駄だったとは思いたくない。

少なくとも俺は祖父という人物を知ることができたように思う。

それは、許せる、許せない、とかいう次元とは、
まったく異なることだけだ。

「俺、未来に戻るよ」

「……………考える」

「え？」

「考えておく」

何を？ とは問わなかった。

ヴィッツが、祖父が考えると言ってくれた。

それだけで、とりあえず十分であるように思えた。

18・また、会おうね！

「ええつつ！！！ ヴイツツの孫だったの！？」

どでかい声を出されて、

俺もヴィッツも両手で己の耳を塞いだ。

その表情がまたそっくりだったらしく、アイシスは大喜びで、俺とヴィッツの顔を交互に指差した。

「本当に孫なんだ！！！」

「黙れ、アイシス。鼓膜が破けたらどうしてくれる？」

「だって、最高に面白いじゃないの！」

あなたの孫が未来から遊びに来てくれたのよ！」

「いや、遊びには来てないから」

「ちなみに、ヴィッツと結婚した奇特な女性はどなたかしら？」

興味津々に見つめられて、俺は閉口する。

まさか、君だ、君！ と答えるわけにはいかない。

不用意に未来を語り、
2人の仲が気まずくなくなってしまっていけないからだ。

「髪が緑色なのよねえ……。緑髪の女性かしら？」

「これは染めたんだ」

「あら、そうなの？ 地毛は金髪？」

「そうそう」

「なに！？ 染めただと！？
ふざけるな。我がエルヴィン家は代々金髪の家系だ。
それを染めるだなんて！」

「でも、綺麗よ？ いいじゃないの！」

「もうひとつ言っておく。
我がエルヴィン家は、
数代遡ってもヌメル・アルバムの血しか入っていないからな！」

「だから、何よ！
どうせ私は、ヌメル・アルバムとアクア・アルバムの混血よ。
悪かったわね！」

ぎゃんぎゃん言い争う祖父母に苦笑して、俺は懷から小瓶を取り出した。

それはトキホタルの光液で作られた幻薬で、小瓶に未来に戻るためのものだ。

「ベルタ」

アイシスがにっこりと微笑んだ。

「会えて嬉しかったわ」

「俺も」

心から言う。

彼女は俺が5歳の時に亡くなってしまったから。

「また、会おうね!」

親しみを込めて抱き締めてくれた。

それは友人に対する別れの挨拶であつたけれど、今の俺にはそれで構わなかった。十分だった。

ヴィッツに視線を向ける。

彼も俺を見つめていて、視線が交わると、
気まずいような、くすぐったいような、変な気分になる。
言葉は無い。

ただ、信じるだけ。……良い未来を。

俺は小瓶の中身を一気に飲み干した。

「起きて！　ねえ起きて！」

頭痛がする。

寝過ぎた時のような鈍痛が。

気怠げに体を起こし、瞼を開けば、
見知らぬ女性の心配顔が目に飛び込んできた。

「……………だれだ？」

「…ベルタ……………」

「あ？」

ふわふわと、癖のある金髪。

ぱっちり、大きく開いた緑色の瞳。

どこかで会っただろうか…？

俺より年上だろうか。

幼い頃はさぞかし可愛らしかっただろう顔立ちに、
薄く化粧が施されている。

“可愛い”から“美しい”に羽化しつつある女性の顔だ。

「誰……だ……？」

「どうして分からないの？」

彼女は悲しげな表情を浮かべた。

「私よ、ベルタ。私……。セレナよ」

19 未来の“死”

セレナ。

それは妹の名前だ。

今年、8つになるはずで、
自分より12も年下のはず。

ところが、目の前の女性は俺より年上に見える。
これはいったいどういうことだろうか。

「セレナ…？ 本当に？」

こくん、とセレナが頷いたのを確認してから、
俺は辺りを見渡した。

俺の部屋ではない。
ヴィッツの部屋でもない。
では、ここはどこだ？

セレナの背後から視線を感じ、そちらを見やると、
エルフの青年がペコリと軽く会釈をした。

「彼はイヴァン・ゲルツァー。」

「ここは彼の部屋なの。今はね」

「今は？」

「ここはティファレト男子寮405号室よ。」

「今日、この日にベルタがここに来るって分かっていたから、私、待っていたの」

「待ってた？」

「ベルタが過去から自分の時間に戻るために飲んだ幻薬は、トキホタルの光液の量が適切じゃなかったの。多かったのよ」

「多かった？　すると、ここは……」

「ベルタにとっては“未来”よ。
15年くらい先の……」

「15年？！」

「つてことは、俺、35歳くらい？？？
当然、ここにはいないわけだよな。
そうか。ソレンティアを卒業した後か……」

「……………」

「……………」どうした？」

表情を暗く、口を重くしたセレナに、俺は怪訝に思う。
眉を寄せると、セレナは唇を噛みしめて、瞳に涙を溢れさせた。
ギョツとする。

「おいおいおいおい！ ど、どうした！？」

「うー……」

「セレナ？」

ボタボタと落ちる涙を手のひらで拭ってやると、
セレナは鼻を嚙りながら、震える声を漏らした。

「ベルタは…っ、卒業してないっ
ソレンティアを卒業…できなかったの……」

「げ…。マジか……」

不真面目が過ぎたんだろうか。

授業の出席率が低いのは自覚ある。

勉強よりも遊びの方を重視している自覚も。

それでも卒業はしたいと思っでいて、

そこそこ学業もこなしてきたつもりだ。

ところが、卒業できないという未来があるという…。

（へこむし）

だけど、俺が本気で凹まなければならないことは、
むしろ、ここからだった。

ガバリ、とセレナが覆い被さるように抱き付いてきて、
縋るように、ぎゅっとしがみついていた。

「なんで卒業できなかったのか、聞かないの？」

「卒業許可が貰えないうちに27歳になってしまったから？」

「ベルタは27歳になっていないわ。26歳にもなれなかった…」

「それ、どういう意味だ？」

セレナの指が俺の肌の上を滑って、呪詛をなぞるような動きを見せる。

もしかして、と思う。

ごくりと咽^{のど}になる。

血が。下へ、下へと、引いていくのが分かった。

「……………死んだ…のか？」

「殺されたの！」

それは予想外の答えだったが、自分の未来が“死”であることは、肯定されてしまった。

「殺された？ いったいなんで？ 誰に？」

「リンドブルムよ」

「リンドブルム？」

はたして聞き覚えのある名前だろうか。
いや、初めて聞く名前だ。

では、なぜ、自分はそんな名前も知らないような人物に、
これから殺されなければならないのだろうか。

「誰なんだ？ その……リンドブルムとかいうヤツは」

「リンドブルムは、嘆き谷の生き残りなの」

「嘆き谷の？」

そこは、祖父ヴィッツが滅ぼしたダークエルフの村だ。
生き残りとはどういうことだろうか。

「まさか生き残りがいたのか？」

ヴィッツが放った魔法は、凄まじい威力を放ち、
ダークエルフたちの命を一瞬で奪ったはず。

あの魔法から逃れ、生き残った者がいたとは信じがたいことだ。

「リンドブルムは赤ん坊だったの」

「だから逃れられた？　そうは思えないけど？」

「リンドブルムは嘆き谷の領主の孫だったの。」

そして、エルフとダークエルフの混血だったのよ」

「領主の孫？　…混血？」

「父親は嘆き谷の領主ドレイクの息子ブルクハルトで、母親は響き谷の領主フリーゲルの妹イドウベルガ」

（待てよ。その話聞いたことがあるぞ）

俺はジルベルトから聞いた話を思い出した。

アルヘイムとアルカウムの境に2つの谷がある。

ひとつはアルヘイム側にある“響き谷”、

もうひとつはアルカウム側にある“嘆き谷”。

この2つの谷に棲む者たちは、

互いの種族を尊重し、平和を強く願い、

響き谷の領主フリーゲルは妹を、

嘆き谷の領主ドレイクの息子に娶せた。

「そうして生まれたのが……リンドブルムか……」

っていうか！

リンドブルムは、あのドレイクの孫だという。
その孫がなぜ俺を殺すのだろう。

なぜ？

愚問だった。

ヴィッツがしでかしたことを思えば、

殺されるくらいに憎まれても何ら不思議ではなかった。

20・悲しいが過ぎると、途方に暮れる

（そうか…）。

俺は、リンドブルムという名の者に殺されるのか（

それが自分の未来なのかと、俺は漠然とする。

どこことなく思っていた。

幼い頃から。

自分が歩んでいる道は、人よりずっと短くて、
途切れているような気がしてならない、と。

他の道に進みたくとも、一本道で、
別れ道など無く、俺はその短い道を進むしかない。

いつか途切れた場所まで歩き着いてします。

途切れた先は、暗闇。

引き返すことは許されない。

ただ、ただ、決められた速度で道を歩み続ける。

そして、いつか、途切れた道から闇へと突き落とされるのだ。

「ベルタ！」

名を呼ばれて、ハッと正気に戻った。

涙いっぱい瞳に焦点を合わせて、俺は小さく謝罪をした。

「どうして！ どうしてそうなの！」

もっと足掻いてよ！

そんなに素直に未来を受け入れないでよ！

……し、しんじゃ……いやだよ……」

「セレナ……」

「ベルタには分からないわ。

ベルタが死んだという知らせを受け取った時の私の気持ちなんて
っ。

信じられなかった！ だって、死体すら残らなかったんですもの」

「なんだって……？」

「これは聞いた話よ。

ベルタはリンドブルムが放った魔法で、一瞬にして灰になったぞ
うよ。

その場にいた人みんなが、ベルタの死を信じられないくらいに、
それは一瞬で……。

家でベルタの帰りを待っていた私が、
その知らせを聞いて、とても信じられなかった気持ち、分かるで

しょ？」

「……………」

「なぜベルタは死んだのか、どうやって死んだのか、誰が殺したのか、知りたくて、私いろんな手を尽くして調べたわ。幸いなことに、ここに入学することができて、それらを知ることができたの」

そう言つて、セレナはきつく唇を噛みしめた。

「私、知ったからには、リンドブルムを許さない」

「セレナ……………」

「必ず、この手で。……私の手で、殺してやる。
ベルタと同じように、骨すら残らないように粉々に、
引き裂いて、引き裂いて、引き裂いて、燃やしてやるんだからっ
……………」

「セレナ……」

信じられないものを見るように、俺は妹を見つめた。
なんだか、途轍もなく悲しかった。

自分死ぬから悲しいのか。

いや、違う。

自分の死よりも、自分が死んだことで、
妹がこんなにも激しい憎しみを負うことになるのかと思ったら、
悲しすぎて、途方に暮れてしまった。

21 代わりに告げるよ、すまなかったと

「セレナ。」

「……復讐なんて考えるのはやめないか？」

「無理よ」

鋭いナイフのように、セレナはキツパリと言い切った。

「絶対に許せないもの。」

「……大丈夫よ。心配しないで。」

そのためにここで魔力を上げて、たくさん魔法を覚えているんだから。」

戦う術は、ちゃんと身につけているわ」

「リンドブルムとかいうヤツを殺すために魔法を学んでいるのか？」

「他に理由なんてないわ。」

今の私は、そのただけに生きているんだから」

「……………」

「リンドブルムは今、アルヘイムで投獄されているわ。」

ベルタを殺した罪でね。

当然、ソレンティアも強制退学だったから、彼女は魔法を使えないの。

私が負けるなんて、絶対に有り得ないわ。

必ずベルタの仇を討つ。討てるわ！」

溜息も出なかった。

俺は祖父が掛けた魔法のせいで、攻撃魔法がいつさい使えない。それを残念に思った時もあった。

一度で良いから、みんなみたいに格好良くイグニを放ってみたい…

…とか。

だけど、今の、……未来のセレナを見てみると、

攻撃魔法なんて使えなくて良かったと思ってしまう。

俺の魔法は、誰かを助けたり、

ちょっとした幸せを届けるための魔法でありたい、と。

そして、

セレナの魔法もそうであって欲しいと、望んでしまう。

強く。

心が痛いくらいに。

「…………セレナ。」

俺は復讐や仇討ちなんて望んでいない」

「……………」

「そんなこととして欲しくないんだ」

「……………わかってる。」

たぶん、ベルタならそう言うんだろうな、と思ってた」

「なら！」

「でもね、ベルタ。」

仇討ちってね、残された者の救いでもあるのよ？
お葬式だって、そうでしょ？

人って、死んじゃったら、おしまいなんですもの。

死者が豪勢で盛大なお葬式を嬉しいがるなんて、
遺族の願いでしかないと思うの。

死者のためだと言いながら、結局は、残された者自身のためなの」

だからね、とセレナは濡れた瞳で見つめてくる。

「仇討ちも私自身のためなの。」

あなたを失って悲しくて、悔しくて、

もうどうしたらいいのか分からなくて、泣いて、

でも、泣いてもあなたは帰って来なくって。

誰かが憎くて、やるせなくて、

暴力的な気分が押させ切れなくて。

何もかも壊したくなって、いつそ私もあなたの後を追おうかと思
ったの。

そんな気持ちに区切りをつけるために、私はリンドブルムを殺す
わ。

彼女を殺したら、きっと前に進める。生きていけると思っから」

何も言えなくなった。

気持ちは分かる……それくらいしか。

それでも、やっぱりやめてくれ、と言っべきか。

いや、そう言うのは簡単だ。

だけど、セレナはやめないだろう。

俺が同じ立場なら、きっとやめないだろうから。

「セレナ。……抱き締めて、いいか？」

「……うん。……抱き締めて欲しい」

13歳年下のはずのセレナは、23歳になっていて、
20歳の俺よりも年上で、

俺が予想していた以上の美人になっていて、
8歳のセレナをいつも抱き締めているように、とはぜんぜんいかなかったけれど、
俺は彼女を包み込むように抱き締めた。

「……………死なないで」

「……………」

「一度、起きてしまった過去は変えられないわ。
でも、まだ起きていない未来なら変えられるかもしれないの。
たぶん、そのためにベルタはここに……………未来に来たのよ」

体を離して、セレナは懷から小瓶を取り出した。

「トキホタルの光液でつくった幻薬よ。

ベルタをもとの時代に戻してくれるわ。

……………どうか、死なないで。

…お願いだから、リンドブルムには近付かないで」

どうすれば、助かるのか。

どのように行動すれば、死なずに済むのか。

そんなこと、誰にも分からない。

だけど、俺を殺すのはリンドブルムだ。

ならば、リンドブルムとさえ出会わなければ、死なずに済むのではないだろうか。

そう言うとき、セレナは俺の手に小瓶を乗せた。

「ベルタがもし私をこんな風にしたくないのなら、絶対に死んではダメよ。

どんなことをしても、

どんな風になっても、必ず生きて、

生きて帰ってきて！」

セレナの頬を伝うものを指先で拭いて、

俺は何だか謝罪したくなった。

帰って来られなかった未来の自分の代わりに。

「……ごめんな。帰って来られなくて。

悲しい思いをさせたな。すまなかった。

……だけど、“俺”はちゃんと帰るから。

必ず帰るよ、セレナのもとに。……愛してる」

「うん。私も愛してるわ。……お兄ちゃん」

約束ね、と小指を絡めた後、

俺は小瓶の中身をひと息に飲み干した。

22・いつもの部屋

ぱちつ、と瞼を開くと、そこは見慣れた部屋。

“おもちゃ箱みたいな部屋ね”と言ってくれたのは、はたして誰だったか…。

「起きたの？」

思いがけない声が響いて、俺は跳ね上がるように体を起こした。
声の主を凝視する。

「え…？　なんで、ここに…？？」

もはや、何日も、何週間も以前の話のような気がするが、
俺は過去に飛ぶ前に、たしか俺の体を隣人に頼んだはずだった。

なのに、なぜ、隣人の姿は無く、
代わりに彼女が目の前にいるのだろうか。

「私じゃあ不満なの？」

「そうじゃなくて。……ただ、びっくりしただけだ」

ベッドから足を降ろして、そのままそこに座る。
すぐに立ち上がらなかったのは、立ち上がれなかったからで、
時を越えたせいなのか、くらりと目眩がした。

「具合悪いの？」

心配げな青い瞳に、俺は緩く頭を左右に振った。

「大丈夫。少し寝過ぎただけ」

「本当に？ それなら良いのだけど…」

長い、長い、夢を見ていたような気分だった。
だけど、夢ではないのだと思う。

夢であつたなら、どんなにか良いのにと思う。
セレナの未来がああだなんて、信じたくなかった。

だけど、過去のヴィッツやアイシスと出会え、
話せたことまでも夢であつて欲しいとは思わない。
彼らと会えたことを嬉しく思うから。

「それより、何か用なのか？」

俺は怪訝な顔で彼女を見上げた。
すると、彼女は拗ねたような表情をつくった。

「用が無ければ来てはいけないの？」

「んなこと言っていないだろ。来いよ、いつでも。俺の顔を見に！」

ふざけた口調で言いながら、俺はベッドから腰を上げる。
しばらく座っていたおかげで、もう目眩はしない。
これなら動けそうだ。

俺は両手を挙げ、大きく伸び上がると、彼女に振り返った。

「よく寝たし、少し散歩すつか。付き合えよ？」

23・そして、交わっていく道の先に。

手櫛で寝癖を直しながら部屋を出る。
廊下は少し騒がしい。

「なんか楽しいことでもあったのか？」

「楽しいことというか、
ネツアク寮の人たちがグラウンドで戦闘訓練をやっていたわ」

「戦闘訓練？」

「というより、決闘だったかしら？」

「決闘???」

不穏な響きに眉を寄せる。

「いったい、誰と誰が？」

「誰だったかしら？ 知らない名前だったから…。
ら……り……うーん」

「らり？」

必死に思い出そうとする彼女を伴い、
ティファレト寮のエントランスに向かう。
時刻は、夕暮れ。

エントランスは暖かそうな赤い光に包まれている。

「思い出した。“ラディール”さんよ」

「だれ？」

「ダークエルフの人よ」

「へえ。……その人と？」

「ラディールさんと……もうひとり小さい子よ。ええっと……」

その時、

エントランスの外から明るい声が響いた。

「幻薬の効果が悪かったわ」

「むー。リンドは大きい方が良かったのだ」

「そのうち自然に大きくなれるわよ」

「リンドは大きくなる！
大きくなって、強くなるのだ！」

「はいはい。頑張って」

ティファレト寮にやってくる人影。
少女と小さな子どものものだ。

あ、と俺の隣で短い声が上がった。

「思い出した。リンドブルムちゃんよ。

ほら、ちょうどそこにいるわ。こっちに來るの見えるでしょう？
もう決闘は終わったみたいね」

「……………なんだって…？」

俺は小さく聞き返し、そして、体が凍り付く。

おそらく彼女は律儀に同じことを繰り返してくれるだろう。
だが、今の俺は周りの音がいつさい聞こえなくなってしまった。
心なしか、視界が暗く沈んでいる。

2つの影がエントランスの中に入ってきた。
小さな子どもは自分自身のことを“リンド”と言い、
もう一人の少女に明るく話しかけている。

……この子が……リンドブルム……。

擦れ違う。

浅黒い肌。

闇のように黒い髪は、
肩に着くか、着かないかの長さに切りそろえられている。

湖のような蒼い瞳は大きく、キラキラと輝く。
その瞳と視線が交わった気がしたが、気のせいかも知れない。

……この子が……リンドブルム……なのか……。

未来で会った妹の話では、
リンドブルムが自分を殺すのだという……。

では、この小さな子が、俺を……？

一瞬だった。

だが、その一瞬、

俺はリンドブルムと肩を並べ、擦れ違った。

振り返れば、何も知らない小さな背中が、
どンドン遠ざかっていく。

(……………どうか、死なないで。

…お願いだから、リンドブルムには近付かないで)

未来からセレナの声が聞こえた気がした。

やがて、少女達は廊下の先を曲がり、その姿は見えなくなった。

「ベルタ？　どうか、したの？」

袖を引かれて、ハッとなる。

緩く頭を左右に振って、小さく微笑んだ。

「なんでもない」

微笑んだ……つもり。

ちゃんと笑えている自信は、ちっともなかったけれど、でも、今はそれが精一杯。

なぜなら、俺は今、
未来で知らされた“死”と出会ってしまったのだから。

どうすれば、助かるのか。

どのように行動すれば、死なずに済むのか。

……分からない。

分からないけど、未来通りに時が進むのであれば、
“死”は確実に俺に迫っているわけで、

何もしなければ、あの未来は変わらない。

「とりあえず、あがいてみつか」

「え？」

服の上から腕に刻まれた醜いものに触れる。
怪訝顔をする彼女に振り返った。

「散歩から戻ったら、

学問と真面目に向き合ってみようかな、ってことさ」

ベルタが？ という聞き返しと、
変なものでも食べたのかしら？ という疑問には答えず、
俺は紅色に染まった森の中へと進んでいった。

おわり

23.そして、交わっていく道の先に。（後書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」(<http://solenatia.jp/>)の二次創作小説です。

オリジナル設定や独自の解釈をしている部分があります。

ゲームをプレイしていなければ分からないような内容だったかもしれません。

しかも、二次小説というよりも、プレイ小説といった感じかもしれません。

もしこの小説を読まれまして、興味を持たれた方は、ゲームを遊んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463n/>

時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

2010年10月9日03時27分発行